

伊丹市埋蔵文化財調査概報Ⅳ

有岡城跡・伊丹郷町遺跡の調査

1995年3月

伊丹市教育委員会

序文

猪名川右岸の河岸段丘上にある有岡城は、鎌倉時代末からの歴史を有する古城であります。本丸跡に立ちますと、東方には、猪名川流域の沃野とその後方には豊中市から池田市にかけての低い山並みが開けます。また、伊丹は古代より、都と西国を結ぶ交通の要衝となっていました。このような地を選んで有岡城が築城され、爾来摂津の歴史に深くかかわってきました。

有岡城跡の発掘調査は昭和50年度より始まり、数々の成果をあげてきました。その後昭和54年12月、有岡城の中心部は国史跡に指定されて、現在は史跡公園として市民の憩いの場となっています。

本書は、有岡城侍町および城下町の発掘調査の成果を報告しています。こうした調査成果が郷土史の解明の糸口になることを願ってやみません。

平成7年3月

伊丹市教育委員会

教育長 乾 一雄

例 言

(1)本書は兵庫県伊丹市伊丹1丁目を中心とする、有岡城跡・伊丹郷町遺跡の個人住宅(店舗付個人住宅)建設に伴う発掘調査成果をまとめたものである。

(2)発掘調査は、国庫補助事業として伊丹市教育委員会が実施した。

(3)各発掘調査の期間は、次のとおりである。

第79次調査 平成元年7月3日～7月13日

第88次調査 平成2年7月4日～7月6日

第90次調査 平成2年9月22日～9月27日

第91次調査 平成2年9月28日～10月2日

第92次調査 平成2年10月17日～10月19日

(4)発掘調査は、小長谷正治・中井秀樹(現三田市教育委員会)があたり、田中賢人(現三田市教育委員会)、鈴木市郎がこれを補佐した。

(5)伊丹市教育委員会事務局

平成6年度

教	育	長	乾	一雄
教	育	次	長	原田 實
生涯学習部	部	長	保地	之忠
〃	次	長	宮崎	泰樹
〃	主	幹	滝内	和之
〃	副	主幹	坂上	正道
〃	主	査	片岡	隆
〃	主	任	小長谷	正治
〃	事務	吏員	柄谷	智子
〃	嘱	託	細川	佳子

(6)整理作業は平成6年12月から平成7年2月まで実施した。遺物の実測・拓本・トレースなどの作業は、三輪隆子、岡野理奈、丸岡たかみ、徳永悦子、瀬川眞美子が行った。

(7)本書の編集は細川佳子が行い、執筆はⅡとⅢ-5は小長谷正治、その他を細川佳子が行った。

(8)本書所載の資料は、伊丹市教育委員会にて保管している。

(9)遺物写真中の()内の数字は遺物実測図の番号のことである。

(10)遺構図中の方位は正確に北の方向を示すものではない。

目 次

I	遺跡の概要	1
II	調査の概要	4
III-1	第79次調査	5
III-2	第88次調査	15
III-3	第90次調査	21
III-4	第91次調査	26
III-5	第92次調査	32
IV	ま と め	35

I. 遺跡の概要

位置と環境 有岡城跡・伊丹郷町遺跡の所在する伊丹市は兵庫県南東部に位置する。市域は西摂平野のほぼ中央、盆地状になったところで、西を六甲山地、北を長尾山地、東を千里丘陵に囲まれている。また南に開向し、大阪湾までの距離は約10kmを測る。市の中央部には、南流する武庫川と猪名川との間を、北の長尾山地に端を発する伊丹台地(洪積台地)が舌状に南に向けて長く延びている。伊丹台地は、表面は伊丹礫層に覆われ、平らに見えるが、詳しくみってみると三段の段丘面が認められる。できた順に加茂面・安倉面・中野面に区分される。伊丹台地の標高は40～5mと北から南にゆるやかに傾いていく。

有岡城の立地する加茂面は台地東縁に南北に帯状に延び、最も高く発達し、他の面との境に段差がある。また東側に広がる猪名川低地帯(沖積地)との比高差は10～5mの急崖をなす。有岡城の北端は、伊丹台地をほぼ東西に横切る伊丹断層が走り、ここを限界としている。有岡城は平城であるが、このように自然地形を最大限利用して築城されたのである。

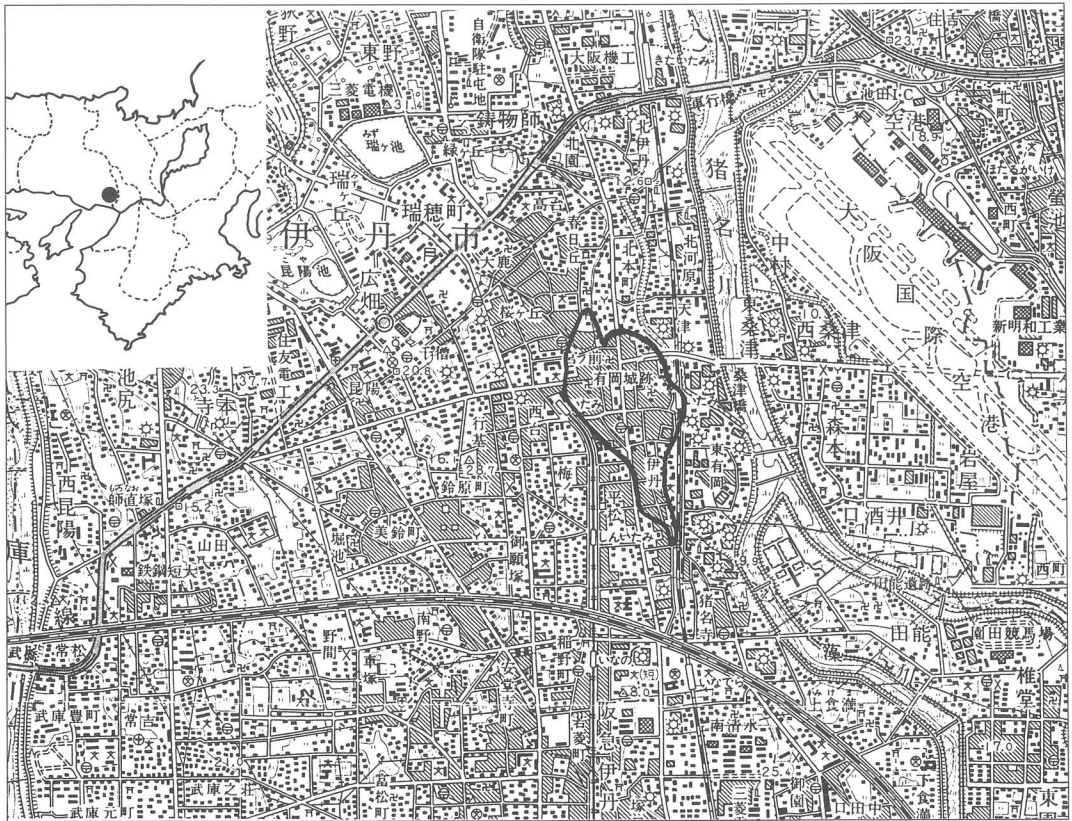


図1. 遺跡の位置図(1/50,000「大阪西北部」)

周辺の遺跡 遺跡の分布を地形的にみても、猪名川流域に広がる沖積地には、大阪空港A遺跡・B遺跡、口酒井遺跡、田能遺跡などがあり、縄文時代後期から弥生時代の遺跡が多くみられる。一方、伊丹台地上は、縁辺部で縄文時代中・後期の遺跡は確認できたが断片に過ぎず、弥生時代は北側の荒牧遺跡、南西端の野間森本遺跡、西端の西野遺跡が、中期から後期の集落跡とわかった。また最近の調査で荒牧遺跡(16次)から縄文時代早期の尖頭器(石槍)が発見された。台地の南縁には帆立貝式前方後円墳で二重の周濠が巡る御願塚古墳や柏木古墳等の中期の古墳が残っている。有岡城跡にも上臈塚古墳(20次)や鶴塚古墳(73次)の存在が明らかになった。台地東縁部の伊丹廃寺跡は法隆寺式の伽藍配置をもつ古代寺院で、有岡城跡とともに国の史跡指定を受け、史跡公園として整備されている。西縁には僧行基が創建した昆陽施院の法灯を継ぐとされる昆陽寺があり、ここで検出された焼土層は有岡城の落城時に織田信長の兵火にあって焼けた跡と考えられる。その他、近世では酒造業で栄えた伊丹郷町遺跡(中世の有岡城跡と同範囲)がある。

有岡城の歴史 有岡城は天正二年(1574)、織田信長の家臣であった荒木村重が入城時に信長の命で改名したもので、それまで伊丹氏の居城の頃は伊丹城と呼ばれていた。

伊丹城の名は、文和二年(1353)の「森本基長軍忠状」に初見される。応仁の乱後、細川家の内紛に巻き込まれ、度々戦禍に合った。近年、主郭部の調査(85次)で2つの焼土層がみつき、2度の火事があったことがわかった。焼土層からの出土遺物で2度の火事は16世紀前半と考えられる。1度目は「細川両家記」によると永正十七年(1520)の火事で、伊丹城は堅固な城であったが、この時落城した。2度目の火事は記録にはない。永禄十一年(1568)信長が足利義昭を奉じて入京すると、伊丹親興は信長方につき、芥川城の和田惟政、池田城の池田勝政と共に摂津の三守護に任じられた。しかし信長が義昭を追放すると、池田氏、和田氏、伊丹氏が荒木村重によって次々と滅ぼされていった。天正二年に伊丹城に入城した村重は、有岡城と改名し、城造りに着手した。城だけでなく城下町をも堀と土塁で囲む惣構構造とし、その要所を岸の砦、上臈塚砦、鶴塚砦が守った。惣構の規模は東西800m、南北1.6kmである。「信長記」によると「城と町の間二侍町御座候」とあり、本丸から内堀を隔てて西側に侍町、さらに大溝筋の西側に町屋が配置されている。町屋側の堀は、猪名野神社から南に延びている宮ノ前通りに面した東側の調査(58次・121次)で、道路に平行して南北に延びる幅3.5m前後の堀が発見された。天正六年(1578)村重は信長に背き、有岡城は大軍に包囲され、1年余りの攻防の末、落城した。その後、池田之助が領有するが、天正十一年(1583)廃城となる。

廃城後の城下町では、文禄年間(1592~96)に伊丹村に15の町が成立し、次第に増え、享保年間(1716~36)には27町が成立した。伊丹村を中心に周辺の大広寺村・北少寺村・昆陽

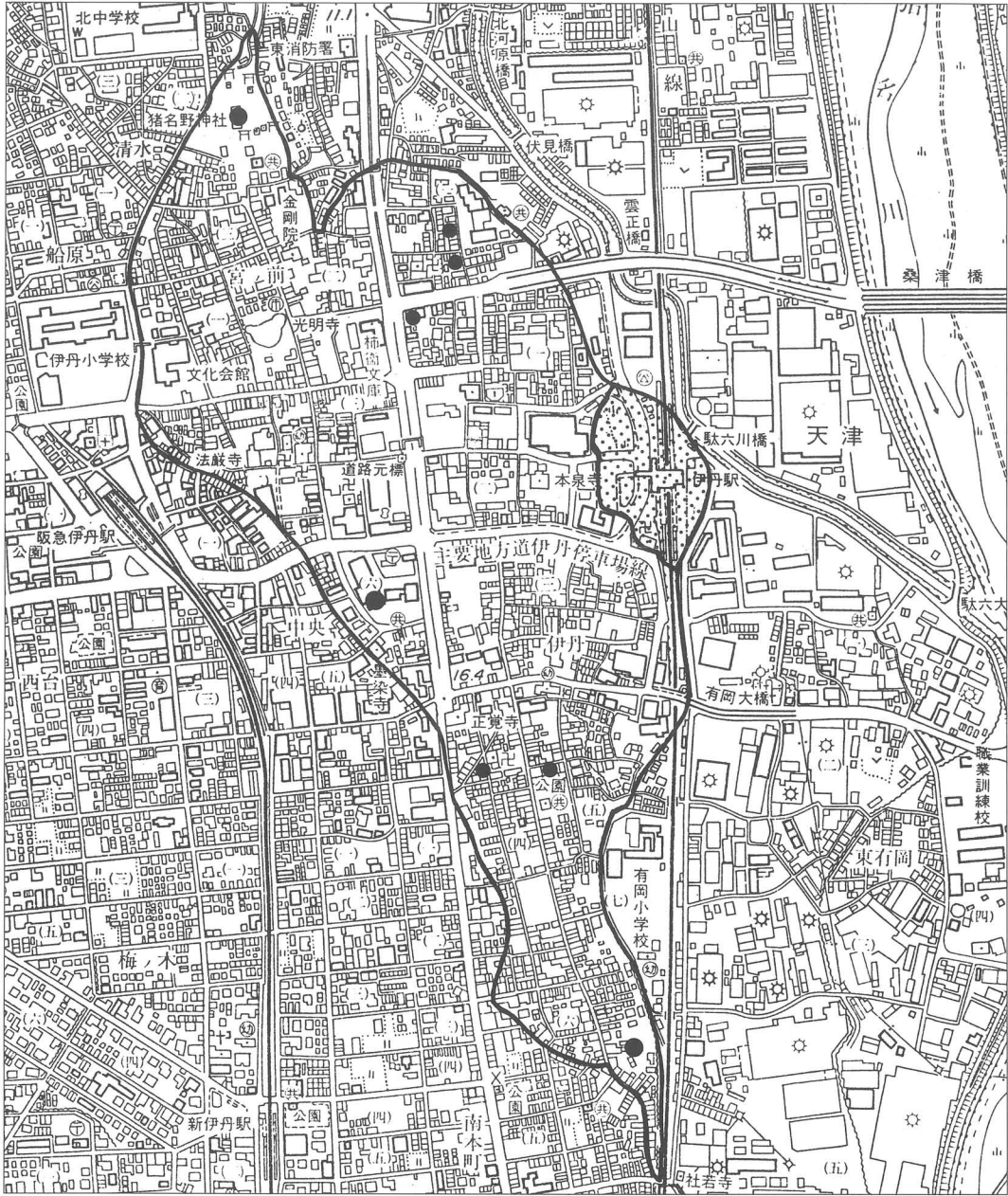


図2. 調査地点図(有岡城跡惣構図)1/10,000

口村など15カ村が一続きとなって、伊丹郷町を形成していった。初めは幕府直轄地であったが、寛文元年(1661)15カ村のうち10カ村が近衛家領となった。近衛家の保護もあり、伊丹郷町は江戸積(江戸へ送る)酒造業で繁栄していった。

- 参考文献 伊丹市立博物館「伊丹の自然」第1巻 1992
 伊丹市立博物館「新・伊丹史話」 1994
 伊丹市役所「伊丹市史」第1巻 第2巻 第4巻 1968～1971

Ⅱ. 調査概要

今回報告する5か所は、有岡城跡第79・88・90・91・92次調査である。第79次調査は平成元年度に実施したもので、88次調査以降92次調査までは平成2年度に実施した。また、発掘調査の原因については、92次調査が店舗付個人住宅、その他が個人住宅建設に伴うもので、いずれも国庫補助事業として実施した。

有岡城の惣構内部の構造については、現在のところ詳しく判っていないが、織田信長による有岡城攻めを詳しく記述した太田和泉守牛一著の「信長記」によると、城と町の間侍町が存在していたことが記されている。また廃城後の「文禄伊丹之図」、「寛文九年伊丹郷町絵図」には、本丸部分と町場の間の広い空地が描かれている。以上の点から有岡城攻めの折り焼き払われた侍町の範囲が、絵図に描かれた空地の範囲と推定される。

こうしてみると、今回報告する調査地点は、第88、91次調査地点が、侍町の最も北側に当たり、第79、90、92次の各調査地点が当時の町場に該当することになる。江戸時代になると、各調査地点は伊丹郷町に含まれている。

第88・91次調査

両地点とも旧侍町の北部地域にあたる。当地点の北側には、「北之口」という地名が残っている。北之口は、江戸時代にはここから池田(大阪府池田市)および多田(川西市多田)に向かう街道が延びており、伊丹郷町と北部地域を結ぶ交通上の重要地点となっていた。遡って有岡城の段階でも同様に重要地点であったと考えられ、北之口の東側で実施した第17次調査において、16世紀代の方形区画の溝跡などが検出されている。第88・91次調査地点の調査では、瓦器碗、土師皿の破片が出土し、掘立柱建物跡の柱穴が検出され、第17次調査と同様に有岡城の侍町の遺構と推定される。

第79・90・92次調査

第79・90次調査は、有岡城惣構えの中でも南部地区にあたる。ともに当時の町場と考えられる。79次調査は、工事範囲が地中深く達しないため有岡城時代の調査ができず、江戸時代の調査までとなっている。「元禄七年柳沢吉保領伊丹郷町絵図」によれば、この地点が酒蔵であったことがわかる。検出された竈1は酒造用の可能性がある。第90次調査では、江戸時代の土坑などが検出された。第92次調査地点は、伊丹郷町の中央部を南北に通る本町筋に面している。そのためか、鎌倉時代の瓦器碗や青磁碗の破片が出土し、当地点の歴史の古さを示している。

Ⅲ－１ 有岡城跡・伊丹郷町 遺跡第79次調査

所在地 伊丹市伊丹5丁目696-2

調査面積 28m²(東西4m 南北7m)

調査期間 平成元年7月3日～7月13日



図3. 第79次調査地点図(1/2,500)

調査概要 本調査地点は、有岡城惣構の要所の一つである鶴塚砦より北へ400mに位置する。調査地点より1軒おいて西側

には大坂道が南北に通っている。江戸時代このあたりは外城村に属している。伊丹郷町を描いた「元禄七年柳沢吉保領伊丹郷町絵図」(図21)によると、当地点は「酒作り庄兵衛」の東奥の一角にあたるので、元禄七年(1694)当時、酒造業を営む家があったと考えられる。

敷地内に東西4m、南北7mの調査区を設定した。基本的な層序は上から表土(第1・2層)、黄褐色土層(第3層)、褐色土層(第4層)、にぶい黄褐色土層(第11層)、褐色土層(第12層)と続き、表土より約70cmで地山に達する。遺構面は3面遺存することが判明した。第1面は表土より12～20cm下、第3層の黄褐色土層を基盤とし、第2面は表土より25～30cm下、第4層の褐色土層を基盤としている。第3面は地山面である。今回の調査原因となった建築物は基礎が浅いため、第3面(地山面)に存する遺構面を破壊しないことから、第3面の調査は実施しなかった。出土遺物により第1面は19世紀以降、第2面は18世紀代と考えられる。

遺構 二つの生活面を調査した。第1面では南北に延びる溝4条を検出し、いずれも幅20～40cm、深さ5～10cmと浅く、黄褐色土層が堆積している。これらの溝は、約60cmの等間隔で南北に延びていることから、耕作時に生じた鋤跡溝と考えられる。その他、調査区東側の壁際で土坑3基を検出した。

第2面で検出した遺構は、井戸1基、竈2基、炉跡1基、土坑13基である。このうち主な遺構について説明することにする。井戸1は中央部に位置する竈1を切って作られている。素掘りの井戸で、径1.1m、深さ1.2mまで調査した。上層は多くの瓦や焼けた壁土を含む。竈1は東西1.9m、南北1.2m、深さ約20cmを測り、方形の掘方をしている。その中に凝灰岩製の方形の切石が二段に積み、北側90cm、東側1.3m、南側1mと石列が「コ」の字状に巡っている。上段の石は長さ10～20cm、幅15cm、高さ10cm、下段は長さ18～20cm、幅15cm、高さ7cm前後で、下段の石は上段に比べると扁平な形をしている。また石組は

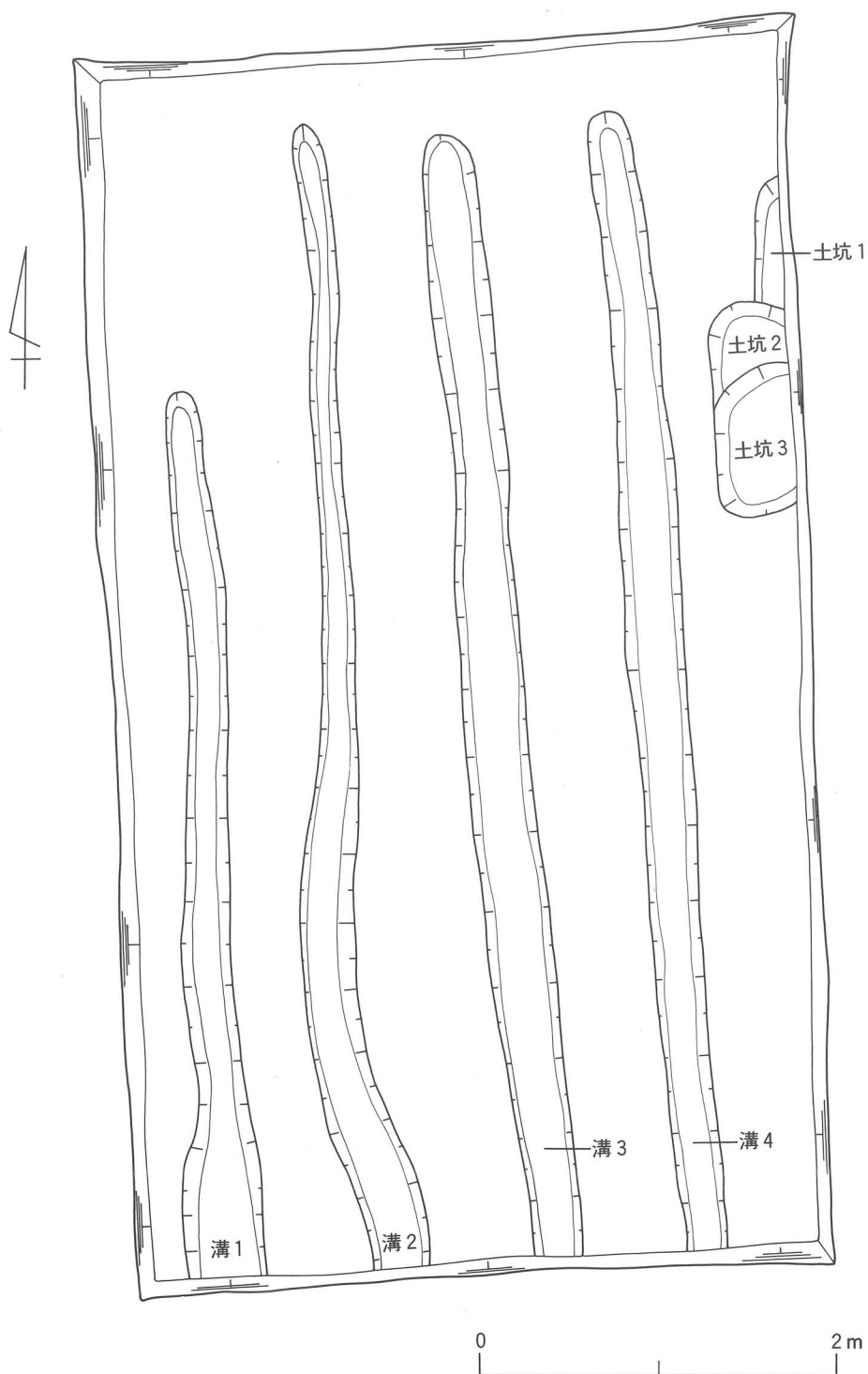


图 4. 第79次調查第 1 面遺構圖

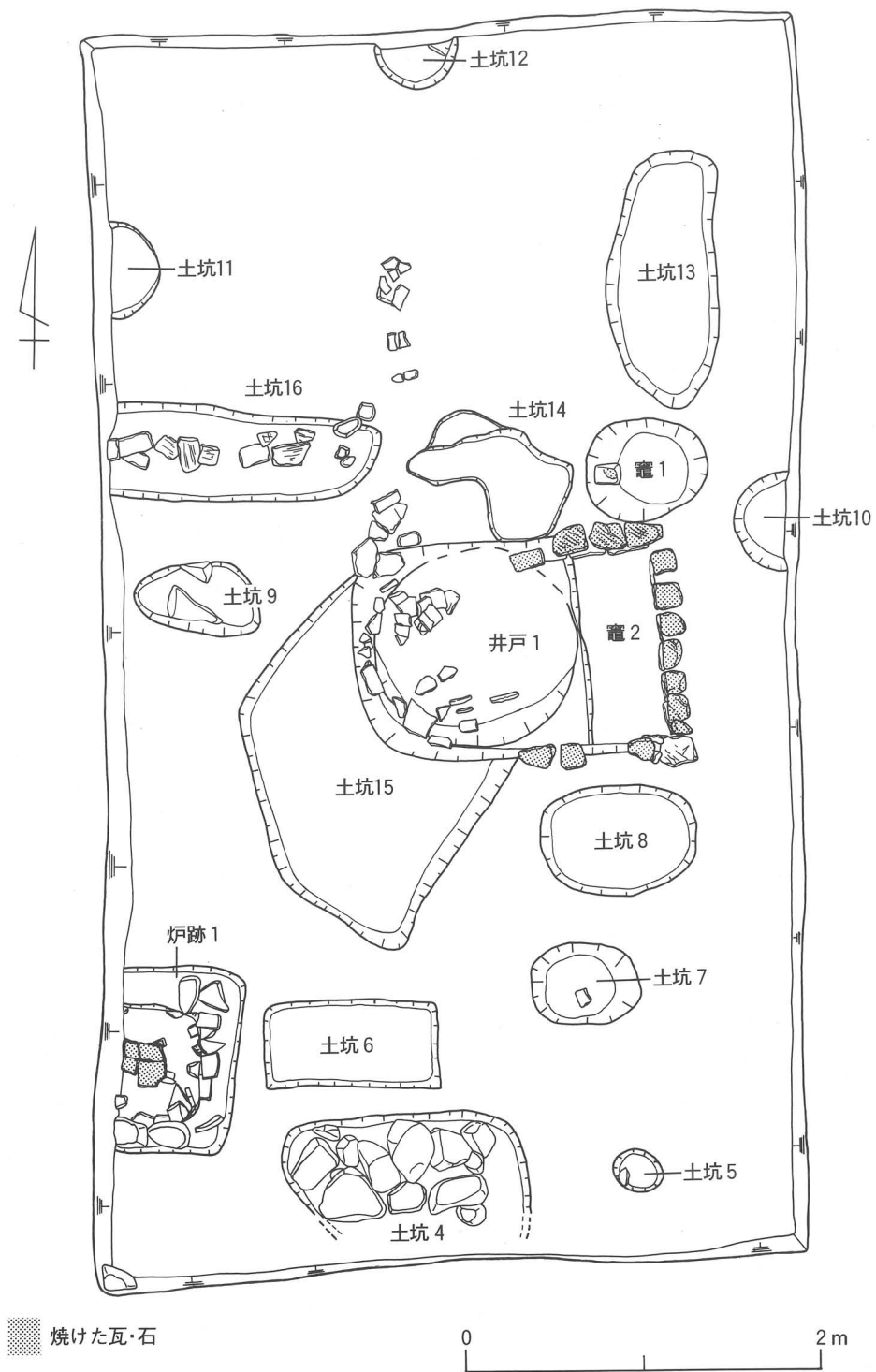


図5. 第79次調査第2面遺構図

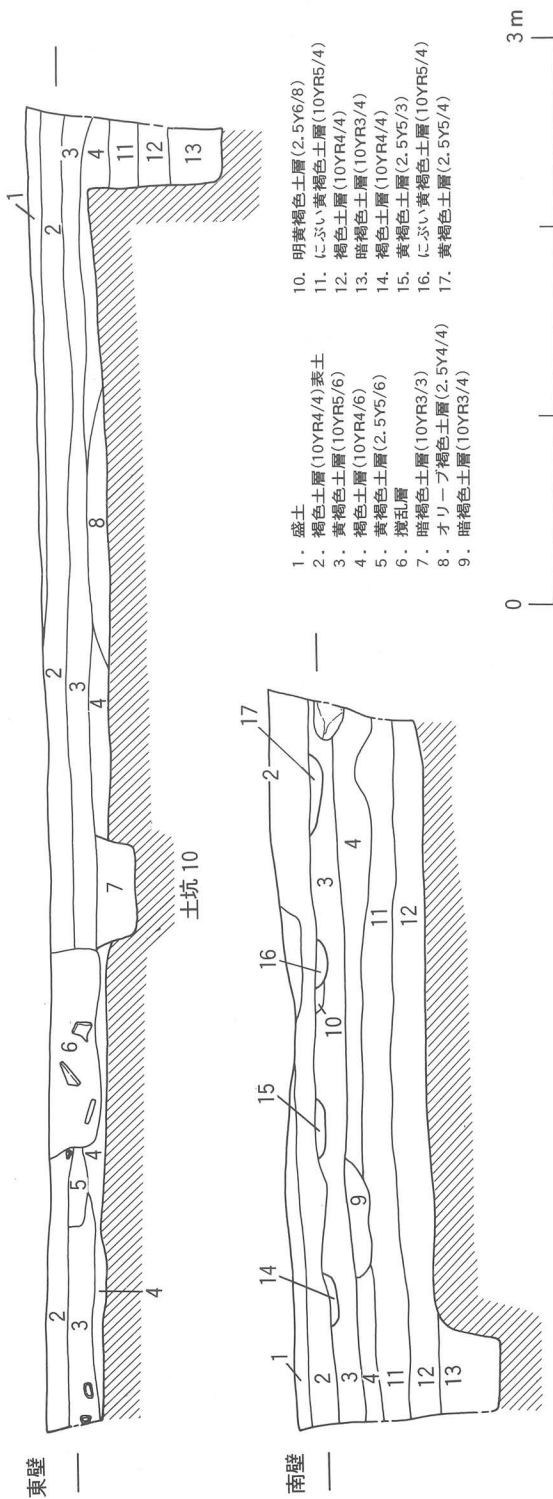


図 6. 第79次調査 東壁・南壁土層図

内側に平面を揃えてある。二段に積まれた石組はいずれも赤褐色に焼けている。床面は非常に硬く焼き締まった状態である。床面の直上には灰と炭の層が約 2 cm 堆積している。竈 2 は竈 1 の北東に位置し、円形で径 55~70cm、残存高 20cm、西側の石は部分的に焼けている。西側には竈の粘土の壁がわずかに残っている。残存状況は悪い。炉跡 1 は東西検出長 65cm、南北 1.05m、床面までの深さ約 20cm を測る。北側と南側に 20cm 前後の石が 2 つずつ並んでいて、その間の東側に平瓦が 4 枚南北に並んでいる。その内側の灰層を取り除くと、床面から 5 cm 上に焼けた平瓦が 4 枚置かれていた。南端の土坑 4 は方形で、東西 1.4m、南北の検出長 60cm、深さ 5 cm を測る。中には 30~40cm の自然石が全体に据えられている。これは建物の礎石と考えられる。

二つの生活面を調査したが、第 1 面で検出した溝 4 条は明治期の耕作時に生じた鋤跡溝と考えられる。古絵図にある酒造業と関連のある遺構は、第 2 面で検出した竈 1 が酒造用の可能性がある。

出土遺物 第 79 次調査の出土遺物の総量は、遺物整理箱に 4 箱、江戸時代中期から後期、それ以降の遺物が大半を占める。

1は第1面の溝3より出土した肥前磁器仏飯具、底径4.2cm、残存高4.6cm、底部には浅い削り込みが施してある。2は土坑4より出土した瀬戸・美濃焼(志野焼)鉢である。推定口径9.4cm、残存高3.6cm、底径5.0cm、内面には突起がついている。底部外面は露胎で他は長石釉がかかっている、粗い貫入が入る。3～8は竈1より出土した。3は信楽焼の灯明受皿、推定口径10.4cm、器高1.8cm、外面は露胎で回転ナデ調整、内面は灰オリーブ色の釉が施されている。4は萩焼の小碗、推定口径7.6cm、器高5.8cm、高台径3.2cm、内外面共に施釉され、外面には「イッチン」で模様が施されている。5、6は肥前磁器碗である。5は口径11.4cm、器高4.9cm、高台径4.4cm、見込みは蛇ノ目釉ハギで、外面には松葉文の染付が施してある。6はくわらんか手磁器碗で、口径11.4cm、器高5.8cm、高台径4.4cm、見込みは蛇ノ目釉ハギで、外面には丸文の染付が施してある。7は均整唐草文軒平瓦、厚さ1.5cm、幅24.5cmを測る。この他にも軒丸瓦・平瓦・丸瓦等が多量に出土した。8は寛永通寶である。9～11は炉跡1より出土した。9は肥前青磁染付蓋、推定口径9.6cm、残存高2.1cm、外面は青磁釉、内面口縁部は4本単位の斜交線文が施されている。内外面共に細かい貫入が入っている。10は砂岩製の砥石、長さ8.2cm、厚さ2.7cmを測る。11は寛永通寶で裏面の方に曲がっている。12、13は土坑8より出土した肥前磁器碗である。12は底部で高台径4.4cm、残存高3.1cm、外面に染付が施してある。13は推定口径10.5cm、残存高3.8cm、外面に梅樹文の染付が施してあり、にぶい発色である。14は土坑10より出土した肥前磁器碗の底部、高台径3.3cm、残存高2.6cm、外面にはコンニャク印判によって桐文が描かれている。焼成は悪く、染付の発色はにぶい。15は土坑12より出土した肥前磁器碗、口径9.8cm、器高5.1cm、高台径3.8cm、高台畳付は露胎で砂が付着している。高台には釉がかかっていない部分がある。外面にはコンニャク印判によって桐文と井桁の中に菊文が描かれている。16は土坑13より出土した唐津系の刷毛目碗である。推定口径10.8cm、器高5.0cm、高台径4.0cm、高台畳付は露胎で砂が付着している。見込みにも蛇ノ目状に砂が付着している。17は土坑15より出土した信楽焼碗である。推定口径10.1cm、残存高4.0cm、体部で明瞭に屈曲する腰折れタイプである。外面に鉄絵が描かれている。18～25は遺構外のもので、18は表土、19と20は第3層黄褐色土層、21は第4層褐色土層、22は第2面、23～25は第3面(地山直上)より出土した。18は肥前磁器碗、推定口径12.2cm、残存高4.4cm、くわらんか手磁器碗で外面に丸文の染付が施されている。摺り絵よる磁器蓋(写真6-3・4)は同層より出土した。19は肥前磁器碗、推定口径9.2cm、器高4.8cm、高台径4.6cm、口縁端と高台畳付は露胎である。外面にはくずし文字の染付が施されている。20は堺焼播鉢、推定口径34.4cm、残存高12.7cmを測る。外面の回転ヘラ削りは口縁部外縁帯の下辺まで施している。外縁帯の張りは大きい。播目12本単位で、底部から口縁

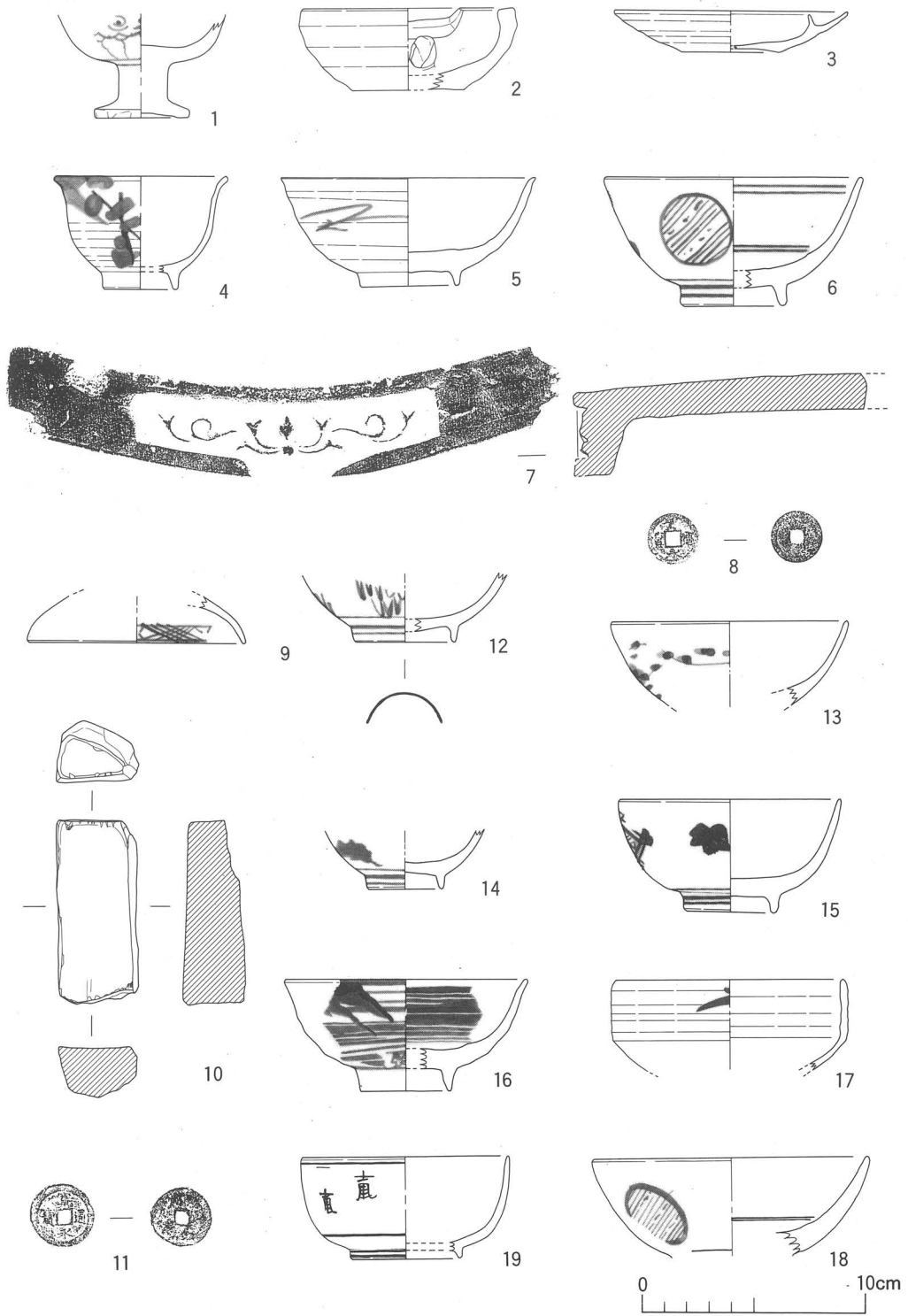


图7. 第79次調査出土遺物実測図

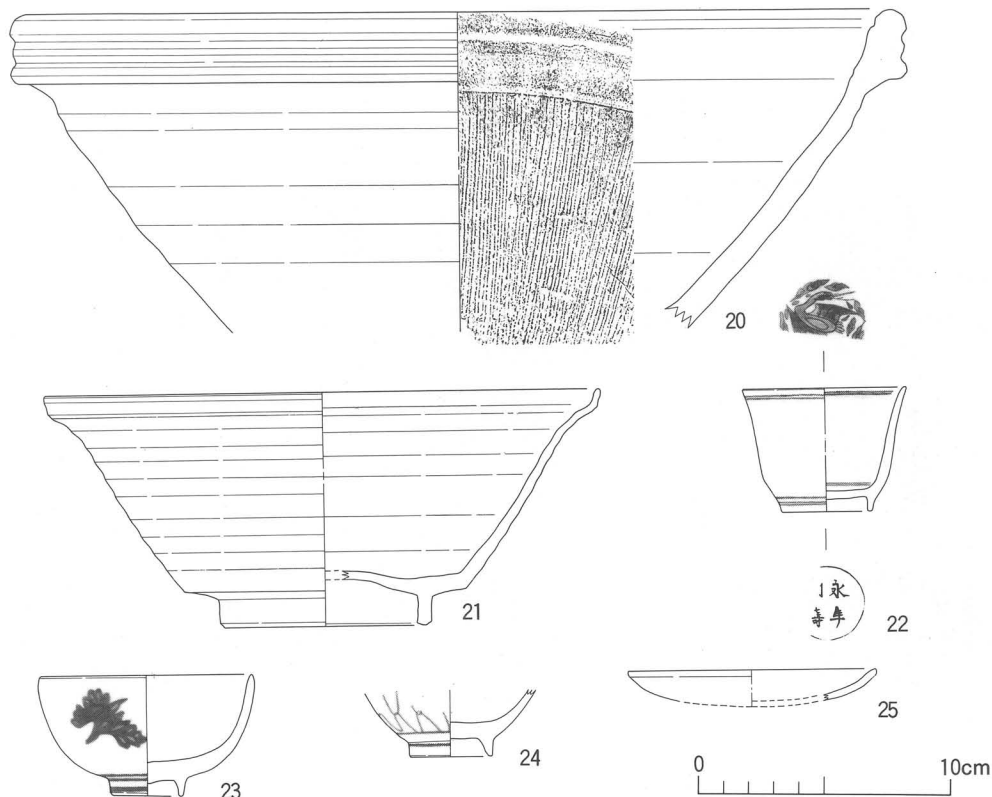


図8. 第79次調査出土遺物実測図

部に向けて入れ、口縁部の摺目はナデにより消されている。色調は赤褐色である。21は信楽焼鉢、推定口径22.0cm、器高9.3cm、高台径8.0cm、口縁部は斜め上方に開き、端部で直立する。底部は露胎で、他はオリーブ色の釉が施されている。22は肥前磁器坏、推定口径6.4cm、器高4.9cm、高台径3.4cm、見込みには鶴の模様、高台内には「永年□壽」の染付が施されている。23・24は肥前磁器、23は小碗、口径8.4cm、器高4.8cm、高台径2.7cm、高台畳付は露胎で砂が付着している。外面にコンニャク印判がある。24は碗の底部、高台径3.2cm、残存高2.6cm、外面に網目文の染付が施されている。25は手捏ね成形の土師皿、推定口径9.8cm、磨滅が著しく調整は不明である。写真7-5～9は土人形、10は煙管、5は表土より出土のおはじき、6～10は第2面直上。6・9は梅花文の独楽、7は芥子面子、8は釜の蓋、型作り成形である。10はの銅製の煙管の吸い口で全長5.1cmである。

第1面の溝4条、土坑3個所の出土遺物は少量である。第1面は明治以降と考えられる。第2面は、竈1・炉跡1は18世紀後半の時期で、この時期の遺構・遺物は多いが、18世紀前半(15・16)の遺物も出土した。また第3面(地山面)は出土遺物(23・24・25)から17世紀中頃から後半と考えられる。

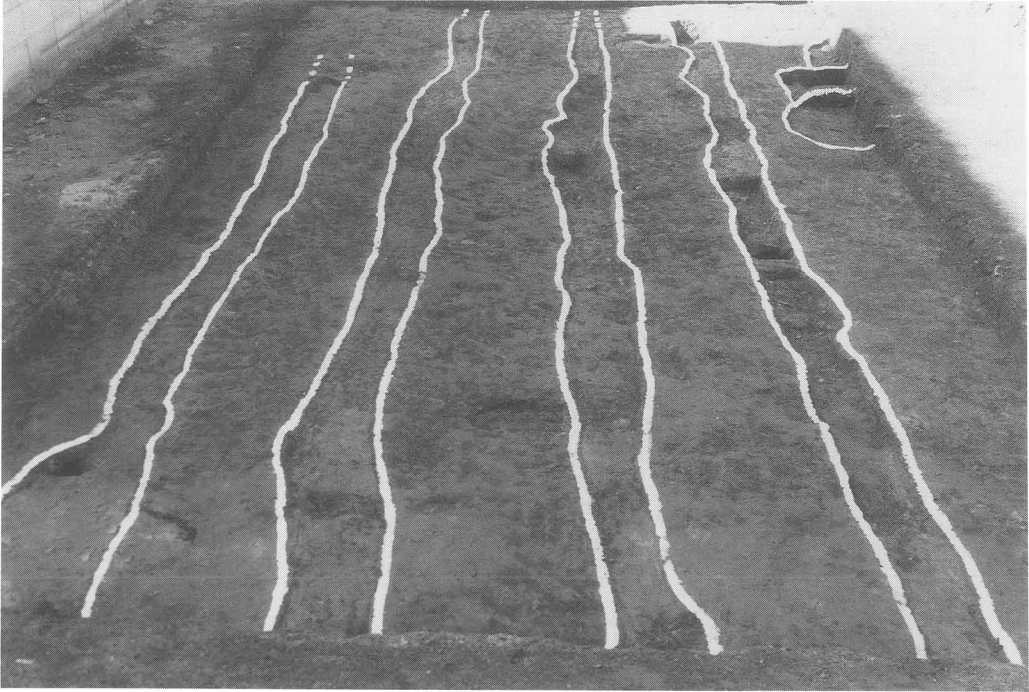


写真1. 第79次調査第1面調査区全景(南より)

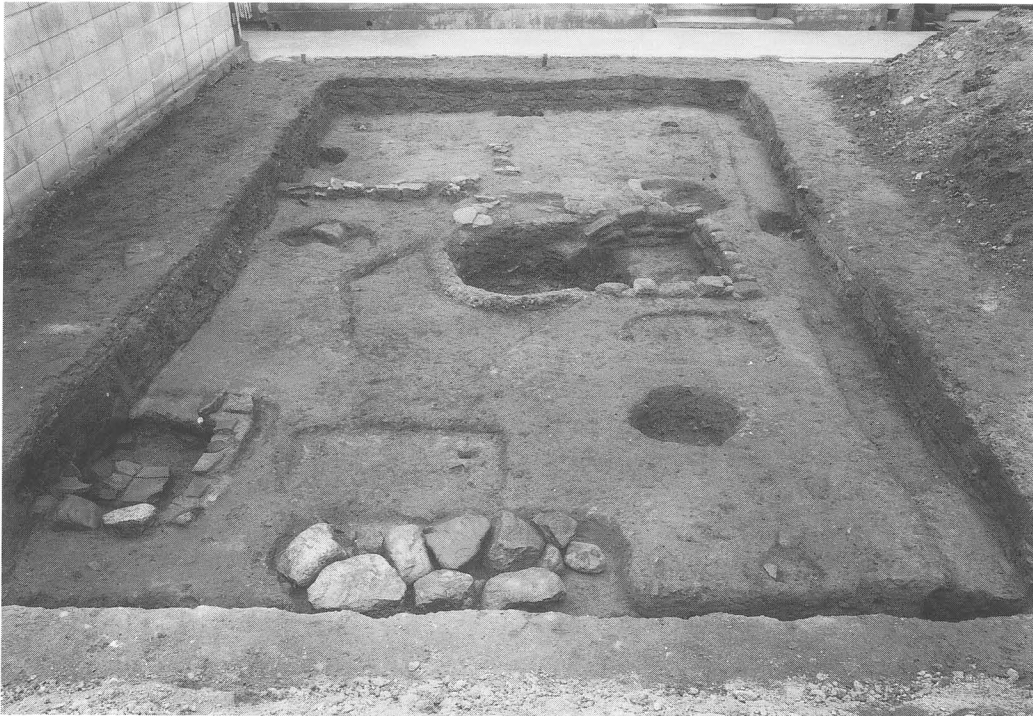


写真2. 第79次調査第2面調査区全景(南より)

写真3.
竈1上面
(西南より)



写真4.
竈1
(西より)



写真5.
炉跡1
(東より)



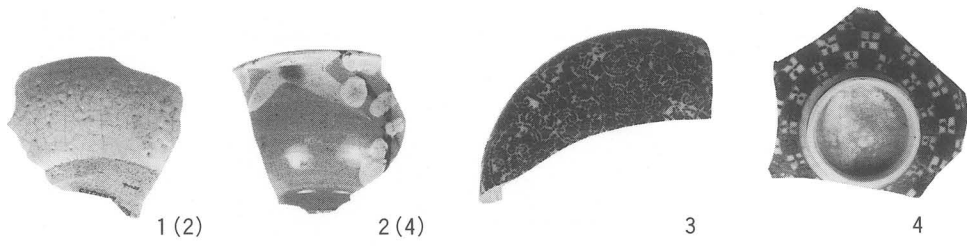


写真 6. 第79次調査出土遺物(外面)

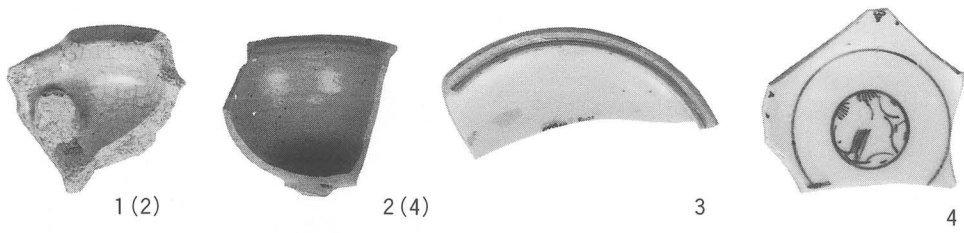


写真 7. 第79次調査出土遺物(内面)

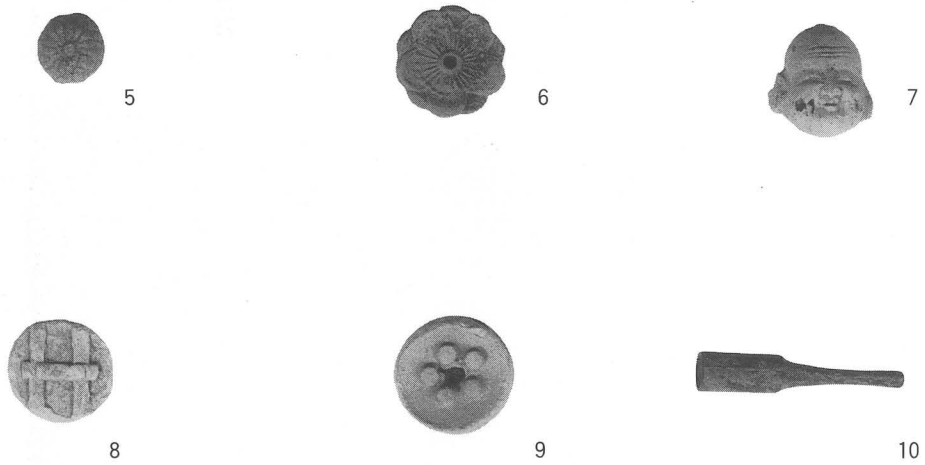


写真 8. 第79次調査出土遺物

Ⅲ－２ 有岡城跡・伊丹郷町 遺跡第88次調査

所在地 伊丹市北本町1丁目79

調査面積 30m²(東西10m 南北3m)

調査期間 平成2年7月4日～7月6日

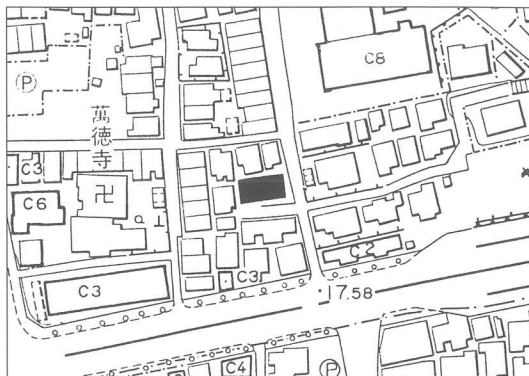


図9. 第88次調査地点図(1/2,500)

調査概要 本調査地点は、有岡城惣構の北東部に位置し、江戸時代このあたりは伊丹村橋町に属していた。「寛文九年伊丹郷町絵図」(図22)をみると、調査地点には町並が描かれていないので、寛文九年(1669)のころは、当地点には家が建っていなかったことがわかる。また、橋町が成立したのは正徳年間(1711～16)のことである。

調査は、敷地内に東西10m、南北3mの調査区を設定して実施した。地山面で遺構検出を行った。基本的な層序は、上層から、20～40cmの黒褐色土層(盛土)、その下には約20cmの明褐色粘質土層の堆積があり、表土から50～60cmで地山面に達する。出土遺物からみて、江戸時代前半の遺構は存在しない。



写真9. 第88次調査区全景(西より)

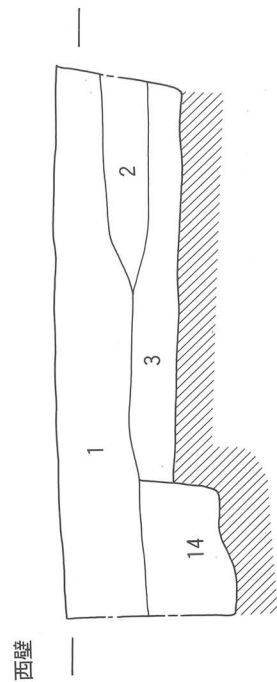
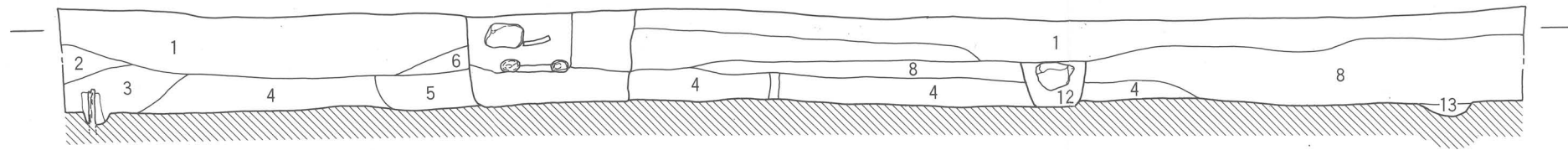
遺構 検出した遺構は、柱穴28基、土坑3基、埋桶4基、杭跡8個所である。柱穴は調査区東側で数多く検出した。調査区の東側に南北に通る道路があり、道路に面して建物が建っていたと考えられる。柱穴1・2は径25~30cm、深さ20cm、埋土は黒褐色粘質土層で、中世の瓦器と土師皿の小片が出土した。柱穴8は、径約45cm、深さ10cm、柱穴1・2と同じ埋土が堆積しているため、遺物は出土していないが、同じ時期の遺構と考えられる。柱穴3は東西30cm、南北50cmの楕円形をしていて、深さ15cm、埋土は灰色砂質土層が堆積している。土師器の小片が出土した。柱穴11からも土師器の小片が出土した。他の柱穴からは出土遺物はなく時期は不明である。土坑1は調査区南西端で検出した。検出長東西2.16m、南北1m、深さ約40cm、埋土は暗褐色土層で瓦と土師器の小片が各1点出土した。土坑2・3は東側で検出され、土坑2は土坑3、柱穴6・25に切られている。深さ5cm、埋土は灰色砂質土層である。土坑3は東西1.9m、南北1mの方形で、深さ20cmを測り、底は平らになっている。底の4隅に杭跡(杭1~4)がみられるが、この杭は横板を組合せて作られた方形の木枠組を固定するものと考えられる。上部は重機掘削時に取り去ったが、レンガ等を含み、新しい時期のものと考えられる。埋桶1~3は南北に並び、桶は同規模である。桶の底板は径45cm、厚さ1.5cm、4枚の板材で作られている。埋桶1は底板と竹輪(タガ)の一部、埋桶2は底板と側板、埋桶3は底板のみが残存している。埋桶4は他の埋桶と異なり、底板の径55cm、側板の残存高15cmを測る。掘方の径77cm、深さ25cm、掘方の埋土は黄褐色砂質土層、桶の中の埋土は泥状の黒灰色粘質土層、桶の底には灰白色砂層が若干堆積している。埋桶4からは江戸時代後半の遺物が出土した。

当地点からは江戸時代前半の遺構は検出されなかったが、中世の遺物が出土する遺

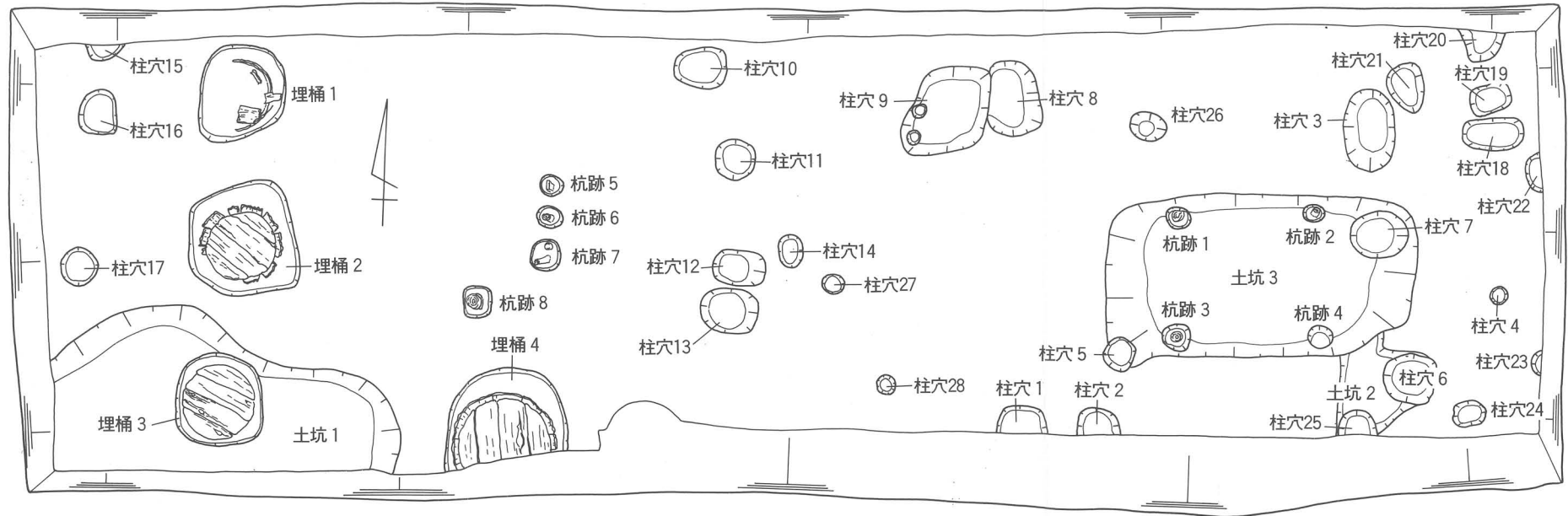


写真10.
埋桶4
(南より)

北壁



西壁



- | | | |
|--------------|-------------|-------------|
| 1. 黑灰色土層(盛土) | 6. 暗灰色砂質土層 | 11. 褐灰色粘質土層 |
| 2. 褐灰色砂質土層 | 7. 黃橙色土層 | 12. 灰色砂質土層 |
| 3. 黃灰色土層 | 8. 暗灰色粘質土層 | 13. 褐灰色土層 |
| 4. 明褐色粘質土層 | 9. 灰色粘土層 | 14. 暗茶褐色土層 |
| 5. 暗灰褐色砂質土層 | 10. 黑灰色粘質土層 | |



圖10、第88次調查遺構圖 西壁・北壁土層圖

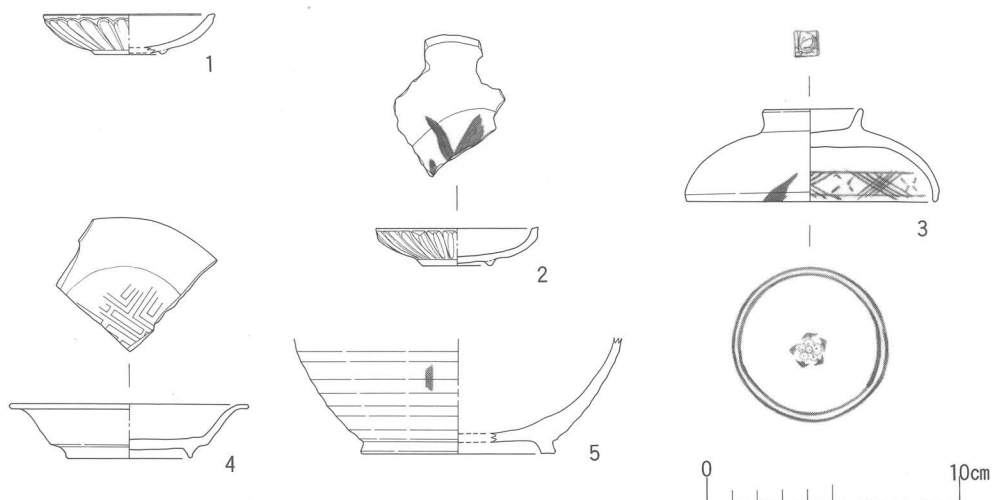


図11. 第88次調査 出土遺物実測図

構(柱穴1・2・3・8・11)を確認した。

出土遺物 第88次調査の出土遺物の総量は、遺物整理箱に1箱である。このうち報告書に図示できた遺物は5点である。

1～4は埋桶4から出土した。1、2は素焼の紅皿である。外面は型作り、底部には低い高台が貼りつけてある。1は推定口径6.8cm、器高1.6cm、高台径2.8cm、釉は内面には全面に、外面には釉がたれている状態である。釉は内面中央部は淡橙色に、他は橙色に発色し、部分的に緑色に発色している。2は推定口径6.4cm、器高1.5cm、高台径2.7cm、釉は内面全体に、外面は露胎である。釉は内面中央部は浅黄色に、口縁部内面は橙色に、中央部の葉状の部分は緑色に発色している。3は肥前青磁染付蓋である。口径9.8cm、器高3.7cm、つまみ径3.8cmを測る。つまみの端部には離れ砂が付着している。天井部内面には二重圏線の中に手描きの五弁花、口縁部には4本単位の斜格子文、外面のつまみの内側には渦福文の染付が施されている。また口縁部外面の一部には染付で描かれている。つまみの内側を除いて外面には青磁釉が施されている。染付及び青磁釉の発色はにぶい。4は瀬戸焼の白磁皿である。推定口径9.4cm、器高2.2cm、高台径4.9cm、器壁は薄く、口縁部は端反になっていて、高台畳付は露胎、底部から体部の屈曲は内外面共に明瞭である。見込みには型による「寿」の陽刻が施されている。これは清朝の模倣品である。1～4は18世紀後半から19世紀代の遺物である。5は遺構外出土の陶器壺の底部で高台径7.6cm、残存高4.6cm、ハの字に開く断面方形の高台で、内面のみに淡灰黄色の釉は施され、外面には墨書がある。

また、各柱穴からは次のような遺物が出土した。柱穴1からは瓦器の小片(写真11-3)、柱穴2・3・8・11からは土師器の小片(写真11-4・5・6・7)が出土した。

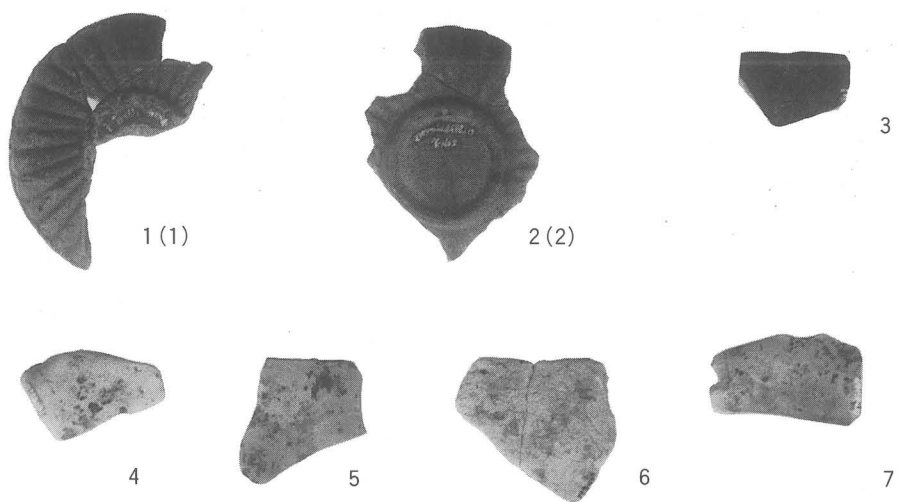


写真11. 第88次調査出土遺物(外面)

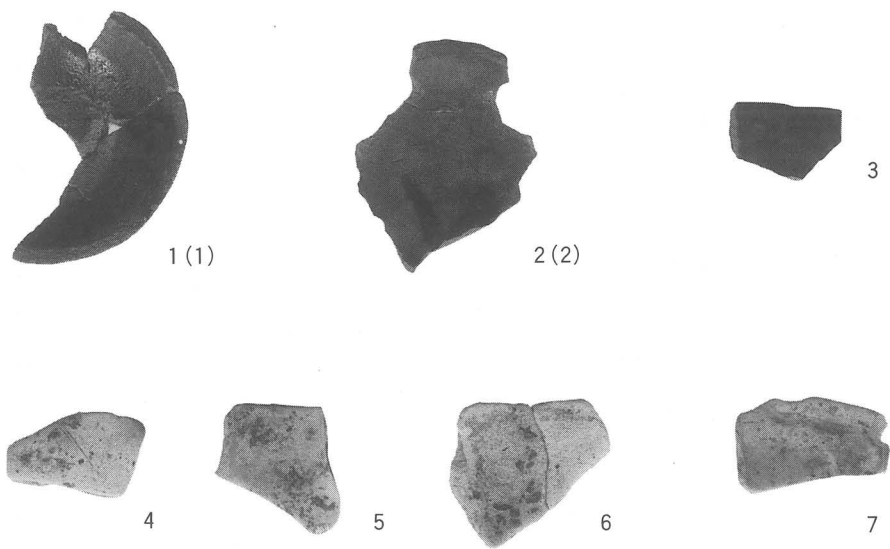


写真12. 第88次調査出土遺物(内面)(3.柱穴1、4.柱穴2、5.柱穴3、6.柱穴8、7.柱穴11)

Ⅲ－３ 有岡城跡・伊丹郷町 遺跡第90次調査

所在地 伊丹市伊丹4丁目726-1

調査面積 24m²(東西6m 南北4m)

調査期間 平成2年9月22日～9月27日



図12. 第90次調査地点図(1/2,500)

調査概要 本調査地点は、有岡城惣構の南西部に位置し、惣構の輪郭部から東へ40m離れている。福円寺の道路を挟んで西側に

あたる。調査地点の西側を北東から南西へ向う道路は、「文禄伊丹之図」や「文化改正伊丹之図」等の絵図(八木哲浩編「伊丹古絵図集成」伊丹市立博物館1982)をみると、大坂道から御願塚道へ至る道である。また、江戸時代このあたりは円正寺村に属していた。

敷地内に東西6m、南北4mの調査区を設定して調査範囲とした。地山面で遺構検出を行った。基本的な層序は、南壁をみると、約10cmの盛土の下に、約6cmの土間(生活面)、その下には焼土を含む褐灰色土層(第24層)が約20cm、さらにその下には橙色粘質土層(第6層)が約20cm堆積し、表土から50～60cmで地山面に達する。地山面は東から西に向かって低くなっており、その高低差は約16cmを測る。

遺構 検出した遺構は、柱穴3基、土坑11基、埋桶2基、礎石2箇所である。柱穴2、3は径25～30cm、深さ10cmを測る。底には根石が置かれている。柱穴2・3の間隔は1.9mである。出土遺物がないので時期は不明である。柱穴1は上層の遺構である。土坑1は第6層を切って掘られている。東西約1.6m、南北検出長60cm、深さ30cm、埋土は焼土層で18世紀前半の陶磁器が出土した。土坑6は東西検出長1.9m、南北検出長1.2m、深さ12cmを測る。上部が削平されている。埋土は土坑1と同様ですべて焼土層である。土坑1・6は火災後の焼土処理土坑と考えられる。土坑7～10は東西に並ぶ。土坑9からは多量の瓦が出土した。土坑10の埋土に含まれる焼土層は土坑1の焼土層と類似する。18世紀前半の遺物が少量出土した。埋桶1の掘方は径60cm、深さ40cm、桶の底板が3枚残存している。底板の推定径は45cmである。埋土は底から10cmまで灰白色砂質土層、上層には灰黄色土層が堆積している。埋桶2は土坑6の底から検出した。掘方は径65cm、深さ約30cmで、埋土は底から褐灰色砂質土層、褐灰色粘質土層、明褐灰色土層の順で堆積している。側面には板材の痕跡がみられる。埋桶1・2からは遺物は出土しなかった。礎石1・2の間隔は約1mである。礎石1は15cm前後の自然石で、礎石2は石臼(下臼)を転用

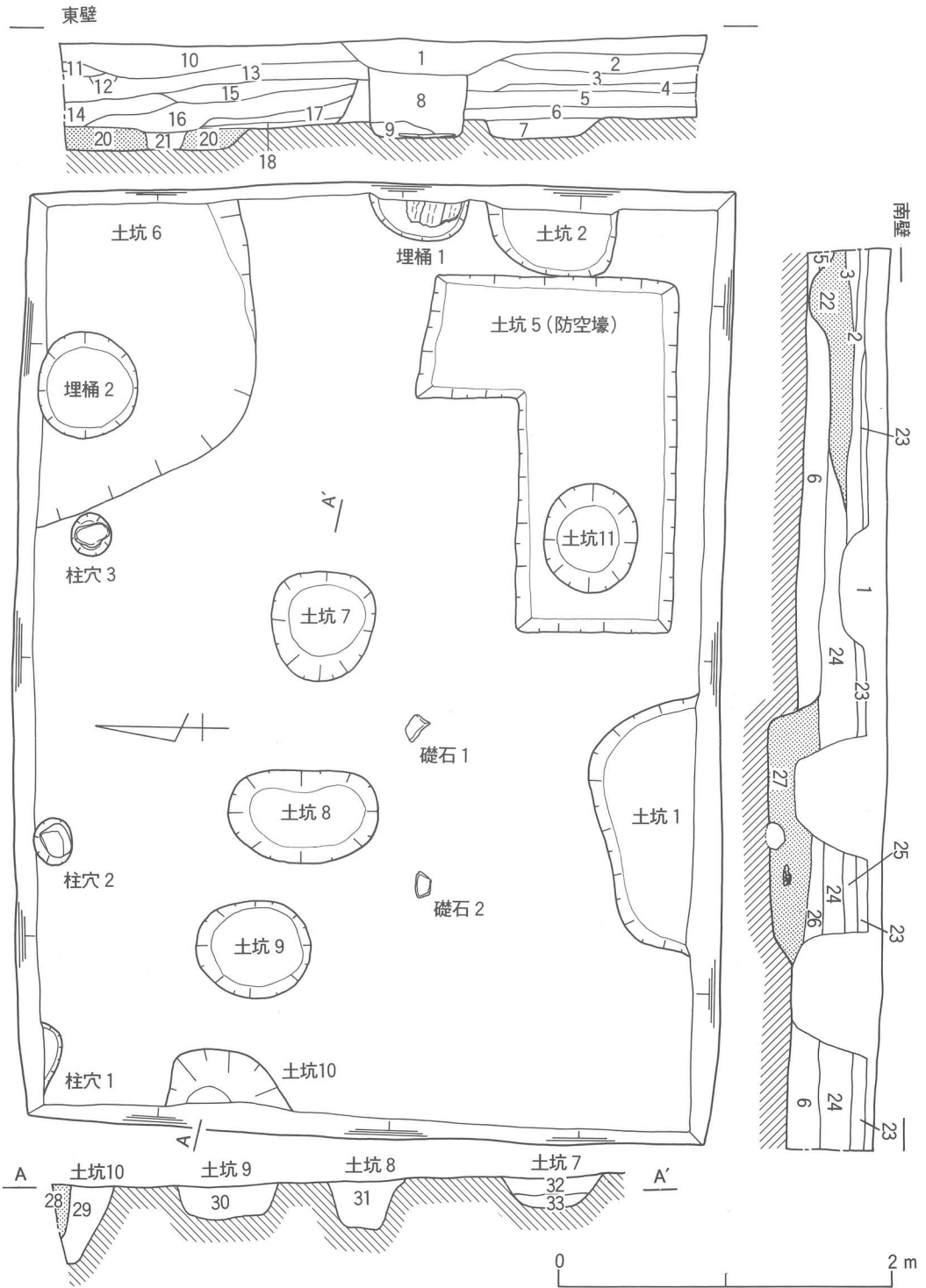


图13. 第90次調査遺構図

東壁・南壁

1. 浅黄橙色土層(10YR8/4)盛土
2. 褐灰色土層(10YR6/1)
3. におい橙色砂礫層(7.5YR7/3)
4. 灰白色土層(10YR7/1)土間
5. におい黄橙色土層(10YR7/2)
6. 橙色粘質土層(7.5YR6/6)
7. におい褐色土層(7.5YR5/3)
8. 灰黄色土層(2.3YR6/2)
9. 灰白色砂質土層(2.5YR8/1)
10. 黒褐色土層(10YR3/1)
11. 暗灰黄色砂質土層(2.5Y5/2)

12. 黄色漆喰(2.5Y8/8)
13. 黒色粘質土層(2.5Y2/1)
14. 黒褐色土層(2.5Y3/1)
15. 褐灰色土層(7.5YR4/1)
16. 褐灰色土層(7.5YR6/1)
17. 褐灰色灰層(5YR4/1)
18. 明褐灰色灰層(5YR7/2)
19. 橙色土層(7.5YR7/6)
20. 赤黒色焼土層(10R1.7/1)
21. 灰白色粗砂層(10YR7/1)
22. 赤黒色焼土層(10R1.7/1)
23. 炭層(5YR7/1)土間

24. 褐灰色土層(5YR7/1)
25. におい橙色土層(7.5YR6/1)
26. 褐灰色粘質土層(10YR5/1)
27. 赤黒色焼土層(10R1.7/1)
28. 暗赤灰色焼土層(2.5YR3/1)
29. 灰褐色土層(5YR6/2)
30. 褐灰色粘質土層(10YR5/1)
31. におい黄橙色砂礫層(10YR7/4)
32. 灰褐色砂質土層(7.5YR5/2)
33. におい橙色砂礫層(7.5YR6/4)

している。礎石1・2はほぼ同じ高さである。

土坑1、6は火災後の処理土坑であるが、それよりも上層の南壁第22層も同様の焼土層である。このことから、当地点で二度の火災があったと考えられる。この地点での火災の記事は、文献には見られず、新たな発見といえる。

出土遺物 第90次調査の出土遺物の総量は遺物整理箱に1箱、すべて江戸時代中期から後期の遺物で、江戸時代前期以前の遺物は出土しなかった。

1～4は土坑1（焼土処理土坑）より出土した。1～3は手捏ね成形の土師皿である。1は口径7.8cm、底部は丸味をもち、外面は指頭圧調整、内面は横ナデ調整である。2は推定口径7.4cm、底部外面は指頭圧調整、他はナデ調整である。1、2は灰白色、1は内面と外面の半分に、2は内面の一部と外面に煤が付着している。灯明皿として使用されていただけでなく、二次的に焼成を受けたと考えられる。3は推定口径7.6cm、外面は指頭圧調整、内面は横ナデ調整、色調は浅黄橙色である。4は肥前磁器皿、口径13.4cm、器高3.8cm、高台径4.4cm、見込みは蛇ノ目釉ハギがみられ、高台は露胎である。内面には線描きで染付が施されている。高台付近に煤が付着しているが、1、2と同様に二次的に焼成を受けたと考えられる。5、6は土坑6（焼土処理土坑）より出土した。5は京焼写し陶器碗、推定口径8.4cm、残存高4.3cm、外面に錆絵で楼閣山水文が描かれている。6は肥前磁器碗の底部、推定高台径4.2cm、残存高2.2cm、高台畳付は露胎で、外面には染付が施されている。7は土坑9より出土した透明釉を施した土師皿で、推定口径5.2cm、ロク口成形(左回転)で糸切底である。内面と口縁部外面は施釉されている。色調は橙色である。8は土坑10より出土した唐津系の刷毛目皿である。推定口径20cm、残存高4.5cm、口縁部は溝縁状になっている。内面は白化粧土による波状の刷毛目、外面上半は灰オリーブ色の釉が施されている。9～11は埋桶2から出土した。9は手捏ね成形の土師皿（灯明皿）、推定口径9.4cm、口縁部が斜め上方に延びる。色調は浅黄橙色で、内外面の口縁部に煤が付着している。10は瀬戸・美濃焼灰釉碗、残存高3.5cm、口縁部から体部にかけて明瞭に屈曲する。内外面共に黄白色の釉が施されている。11は肥前磁器碗、推定口径7.3cm、残存高1.9cm、口銹で外面に染付が施してある。12～15は遺構外から出土した。12は唐津

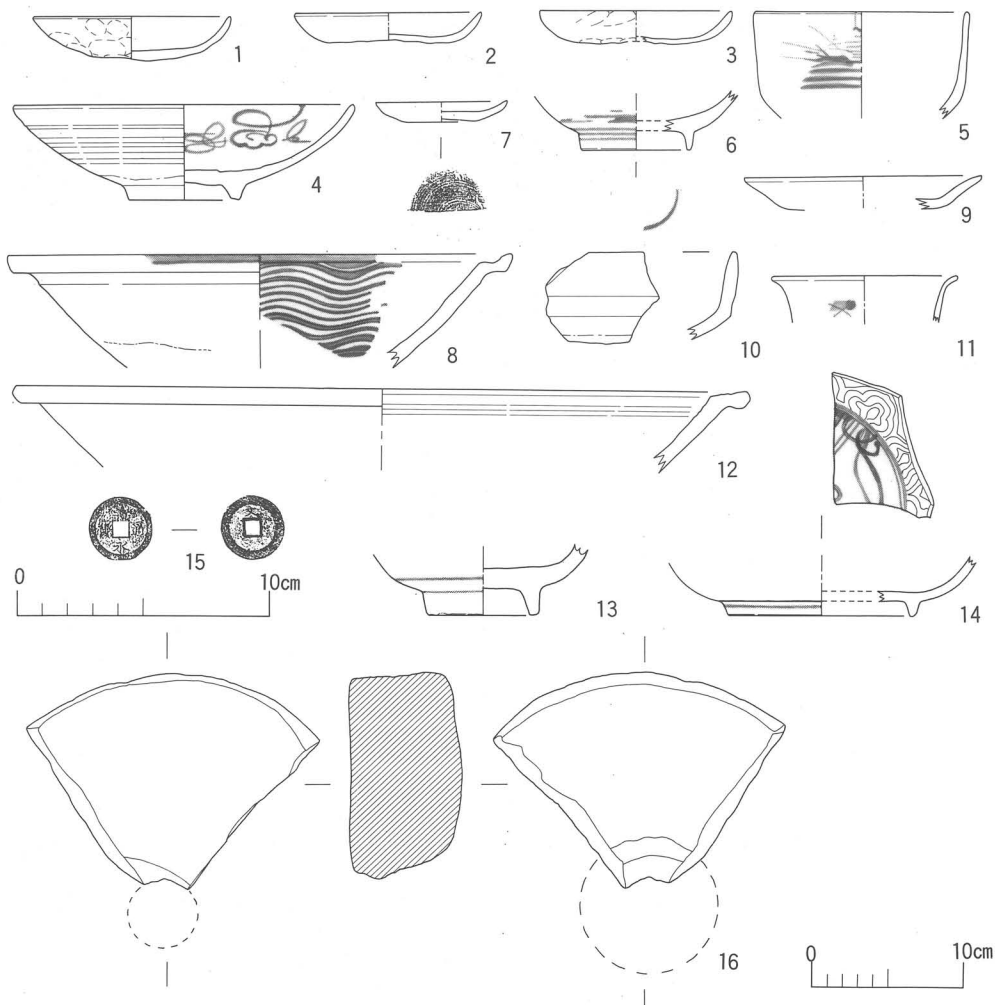


図14. 第90次調査 出土遺物実測図

系折縁皿、推定口径29cm、残存高3.2cm、口縁部平坦面と内面に3本ずつ線刻が施してある。色調は、二次焼成を受けているため白色をしている。13、14は肥前磁器、13は碗の底部、高台径4.4cm、残存高2.8cm、高台畳付は露胎で砂が付着している。外面にはにぶい発色の圏線が3本巡っている。14は皿、高台径7.4cm、残存高2.4cm、内面は型で陰刻されている。見込みには二重圏線の中に染付が施されている。15は寛永通寶で裏面に「文」の字が刻まれている。16は礎石2にあたる。石臼の下白部分で材質は花崗岩である。推定径31.4cm、高さ7.3cm、磨滅が著しく、挿目はみられない。

1～6、8は18世紀前半の遺物で、いずれも焼土層から出土した。焼土層はこの時期に火災があったことを示す。

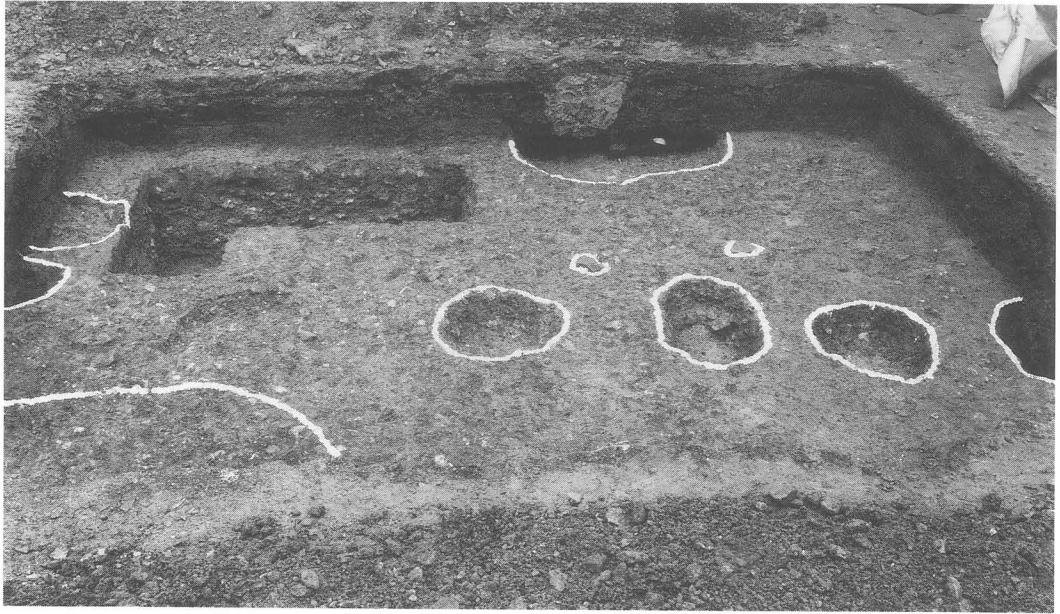


写真13. 第90次調査区全景

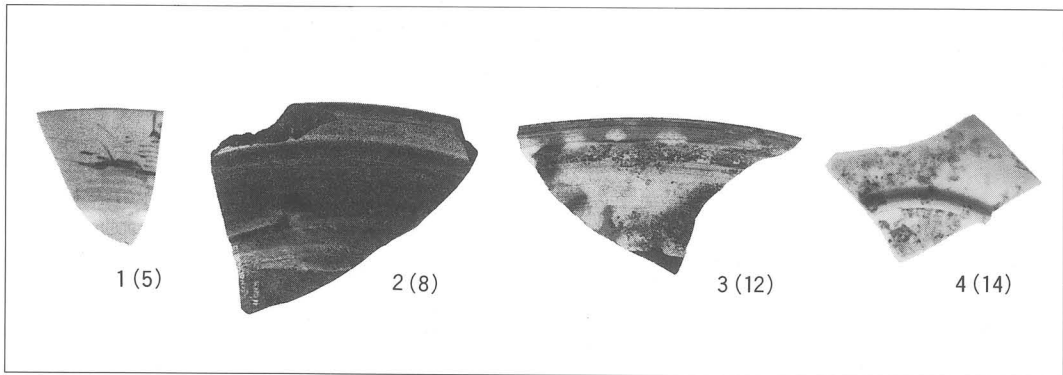


写真14. 第90次調査出土遺物

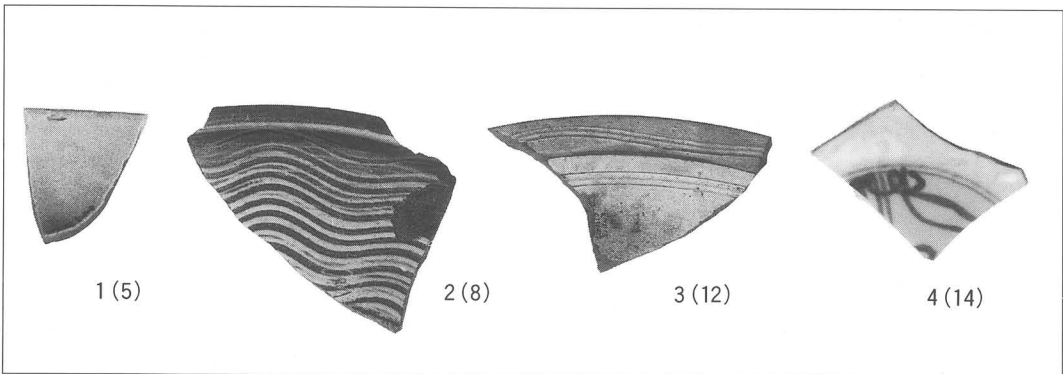


写真15. 第90次調査出土遺物

Ⅲ－４ 有岡城跡・伊丹郷町 遺跡第91次調査

所在地 伊丹市北本町1丁目56
調査面積 21m²(東西7m 南北3m)
調査期間 平成2年9月28日～10月2日

調査概要 本調査地点は、有岡城惣構の北東部に位置し、調査地点より北へ約100mのところには北之口という地名が残っている。

北之口は、虎口状に折れ曲っていることが「寛政八年伊丹細見図」(図23)から読み取れる。有岡城惣構の出入口で、要所の一つであったと考えられる。また本地点より北へ約30mのところで行った第17次調査では、中世の遺構・遺物が検出され、本地点で検出された同時期の遺構との関連性がうかがえる。

基本的な層序は、10～15cmの盛土(第1層)を取り除くと、調査区の西側では約10cmの土間(近代の生活面)が検出された。その下には褐灰色土層(第2層)が20～25cm堆積している。さらにその下には明黄褐色土層(第3層)が約20cm堆積している。表土から約60cmで地山に達する。

遺構 検出した遺構は、柱穴12基、埋桶1基、土坑5基、杭跡2箇所である。柱穴1・2・3・4は掘立柱建物跡と考えられ、径30～40cm、深さ25～35cm、埋土は褐灰色土層で、遺物は出土しなかった。東西に並び、それぞれの柱間は1.9mの等間隔で、東西3間分(5.7m)を検出した。調査区東側の道路と、柱穴列の向きが直行するので、現在の区画とは変っていないことがわかる。柱穴7・8・13の埋土は黒褐色土層で、同じ埋土が堆積しているので同時期の遺構と考えられる。柱穴11からは瓦器の小片が出土した。他の柱穴からの出土遺物はない。埋桶の掘方は東西95cm、南北検出長40cm、深さ55cm、埋土はにぶい黄橙色土層である。桶は底板、側板が良好に残っており、底板は4枚板からなっていて、径70cm、厚さ4cmを測る。側板の残存高は50cmである。埋土は底板から上に10cmの厚さで灰白色砂質土層、その上に灰色粘土層が15cm、さらにその上に明褐灰色土層、淡黄色粘質土層が8cmずつ堆積している。江戸時代後期の陶磁器・煙管が出土した。土坑1と5は深さ約6cmの浅い遺構である。土坑2は径85cm、深さ13cm、底部は平らになっていて、埋土は明褐灰色土層である。土坑3は第2層褐灰色土層から掘り込んだもので、東西1.26m、南北検出長50cm、深さ65cm、埋土は灰色粘質土層である。多量の3～4cm大の礫に混じっ

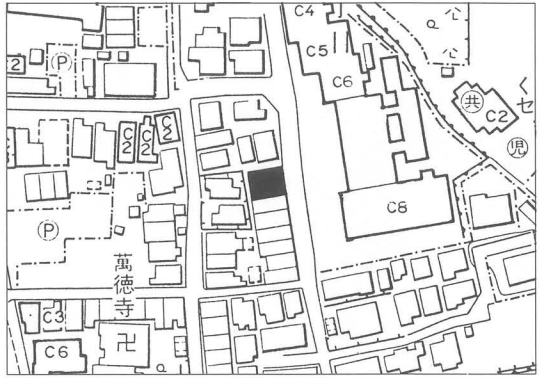


図15. 第91次調査地点図(1/2,500)

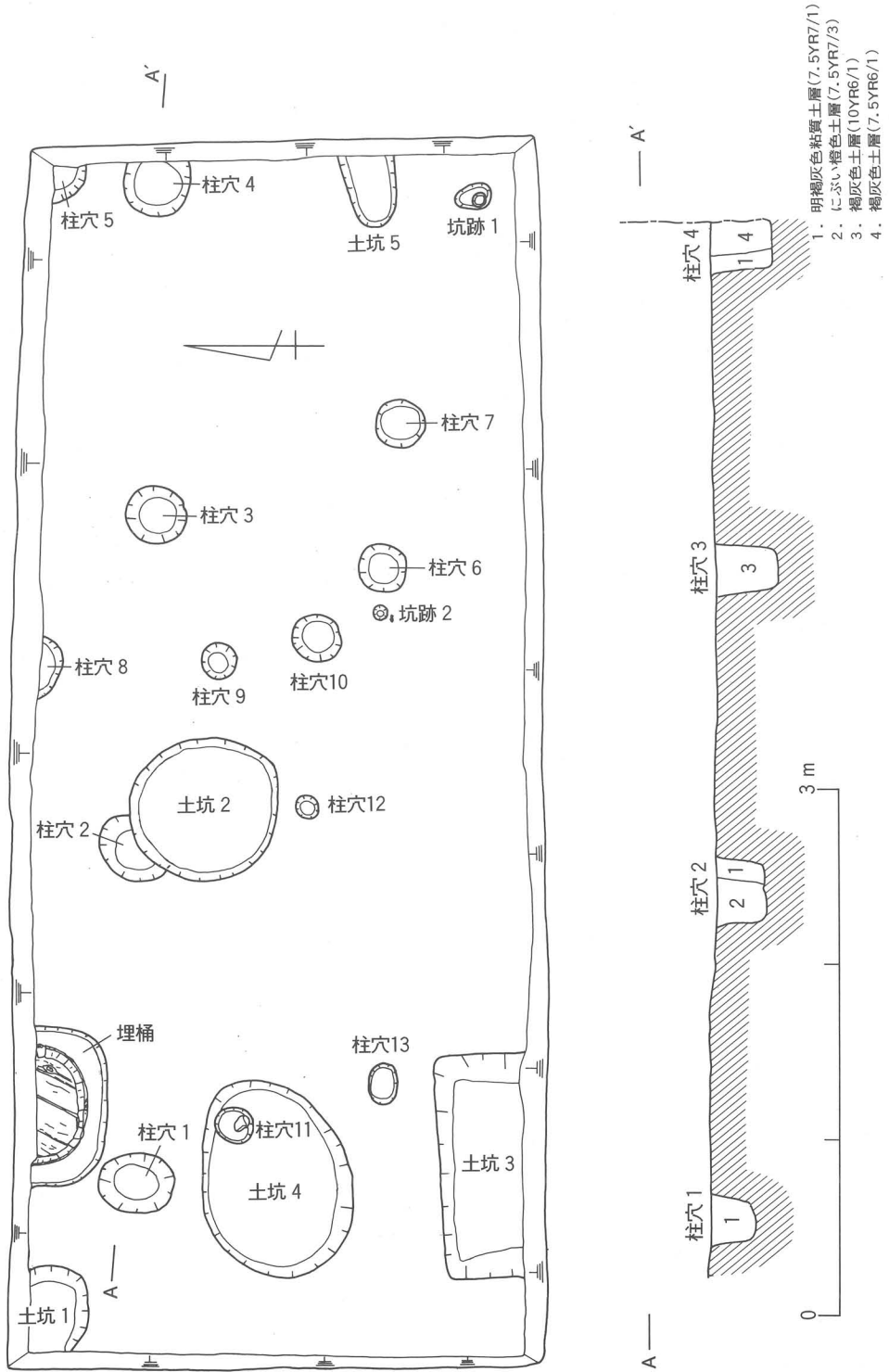


図16. 第91次調査遺構図

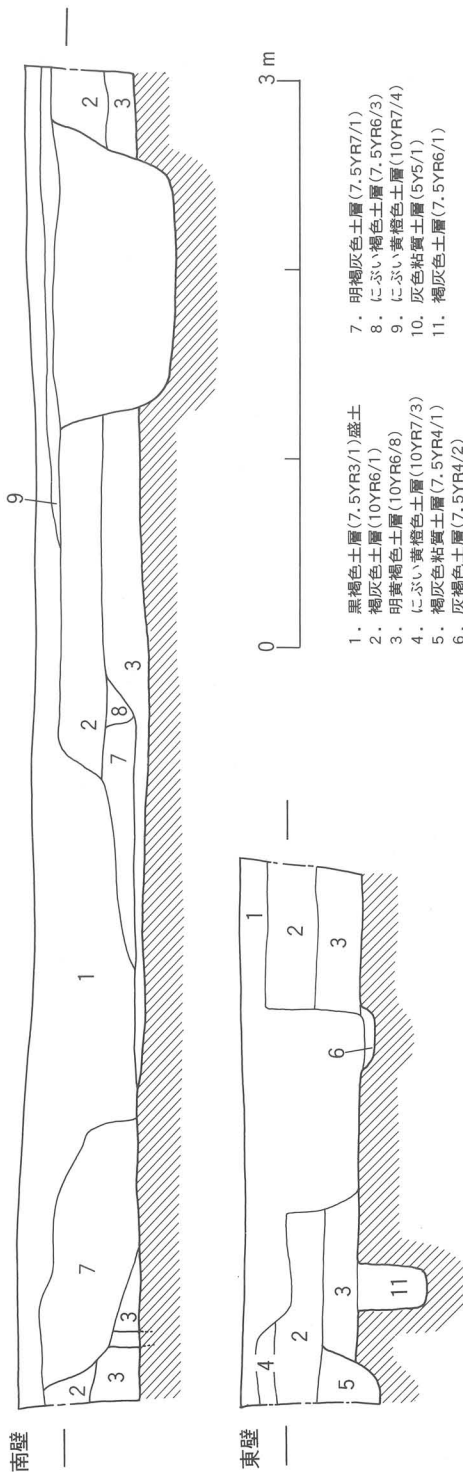


図17. 第91次調査 南壁・東壁土層図

て、江戸時代後期の陶磁器が出土した。土坑4は径85cm～1.1m、深さ10cm、底部は丸くなり、埋土は灰色粘質土層である。瓦と陶磁器が出土した。

遺構からの出土遺物は少ないが、遺構の時期は大部分が江戸時代後半と考えられる。しかし、掘立柱建物跡(柱穴1・2・3・4)はそれ以前と考えられる。また柱穴7・8・11・13は中世の時期と考えられる。

出土遺物 第91次調査の出土遺物の総量は、遺物整理箱に1箱、図示した遺物は12点、これらはすべて江戸時代のものである。これ以外に柱穴11から出土した中世の瓦器の小片等も含まれる。

1～4、12は埋桶より出土した。1は透明釉を施した完形の土師皿で、口径6.3cm、器高1.2cm、ロクロ成形(左回転)で糸切底をしている。内面と口縁部外面には施釉されている。色調は橙色をしている。2は焙烙である。残存高4.2cmを測り、型作りで口縁部の断面は三角形をしていて、内面と外面口縁部は回転ナデ調整を施している。外面には煤が付着している。この焙烙は、有岡城跡第93次調査(宮ノ前2丁目の光明寺の西側)で発見された焙烙窯から出土したものに同形体のものがある。またこの焙烙窯からは焙烙の型も出土した。3は白磁紅皿である。口径4.7cm、器高1.3cm、高台径1.5cm、型作りで外面に放射状の刻目をもつ。4は肥前磁器筒型碗、推定口径7.3cm、器高6.2cm、高台径3.7cm、高台畳付は露胎で、高台内及び底部は釉が虫食

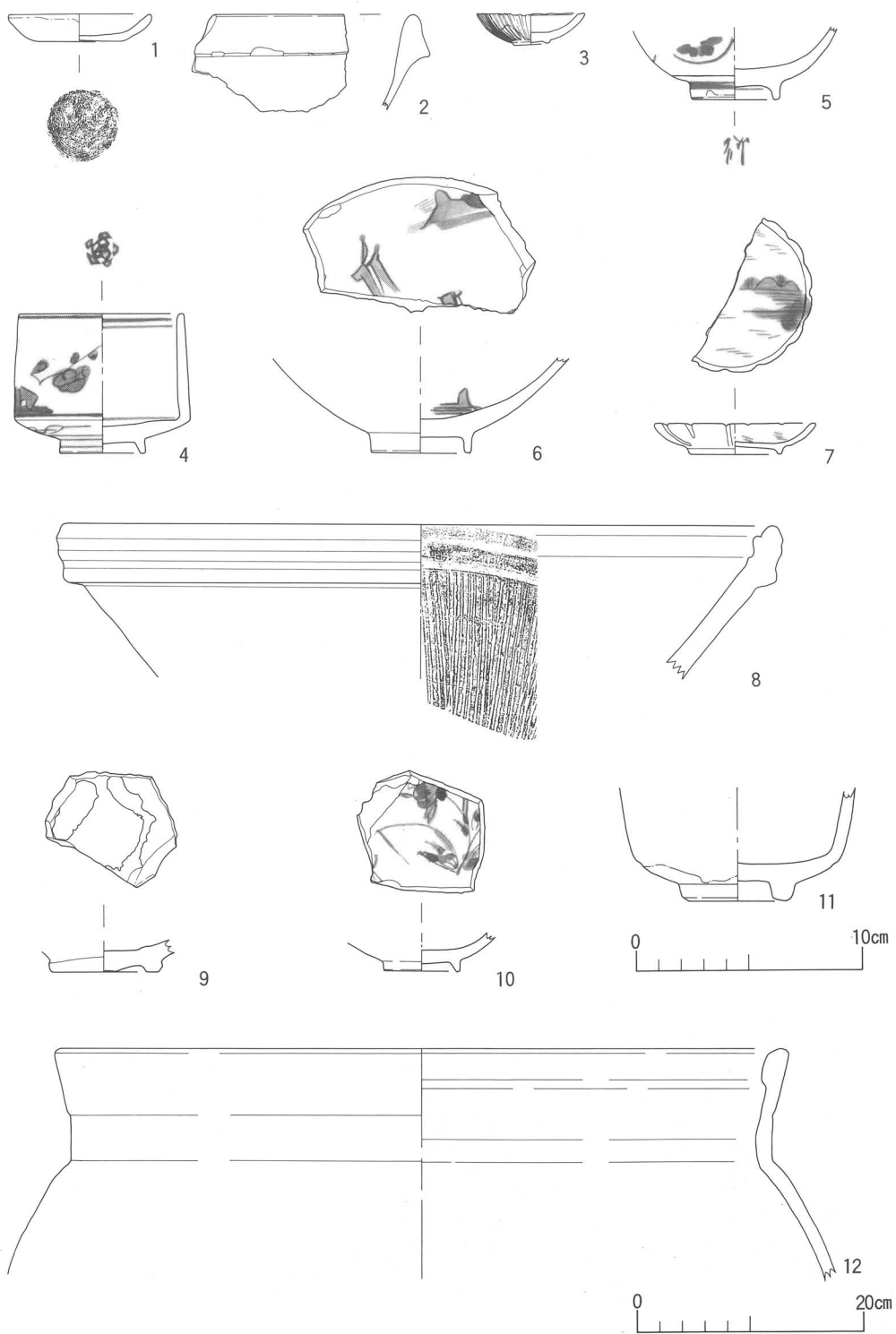


図18. 第91次調査 出土遺物実測図

い状にかかっていない部分がある。内外面共に貫入がみられる。見込みには手描きの五弁花、外面には梅樹文の染付が施されている。12は陶器の大甕である。推定口径64cm、残存高20.3cmを測り、口縁部は垂直気味に立ち上がり、その後斜め上方に開く。口唇部内面は肥厚する。内外面は鉄釉が施されている。この他、埋桶4からは銅製の煙管の吸口(写真18-6)等も出土した。これらの遺物は18世紀後半から19世紀前半の時期と考えられる。5～9は土坑3より出土した。5～7は肥前磁器である。5はくらわんか手の碗で、高台径3.9cm、残存高3.2cm、高台畳付けは露胎である。高台内には銘款が施され、体部外面には連続の丸文の染付が施されている。6は皿で、高台径4.3cm、残存高4.2cm、高台畳付けには砂が付着している。内面には山水文の染付があり、呉須は線描きの部分が深緑色で、その他は青色に発色している。7は輪花皿で、推定口径7.2cm、器高1.4cm、高台径4.0cm、器壁は薄く、外面は型押しによる成形で菊花状になっている。内面の染付は山水文である。8は堺焼播鉢、推定口径31.2cm、残存高6.8cm、口縁部内面には凸帯が巡る。外面の回転ヘラ削りは口縁部外縁帯のやや下までくる。播目は8本単位で、底部から口縁部に向けて入れてあり、その後、口縁部の播目を回転ナデ調整により消してある。体部内面に重ね焼の跡がみられる。色調は暗褐色である。9は砂目積の唐津焼皿である。高台径4.7cm、残存高1.4cm、削り出しによる輪高台で、高台内の削り込みは浅い。高台畳付けにも砂目痕がみられる。内面には灰オリーブ色の藁灰釉が施されている。5～9の内、6、9は17世紀前半のものであるが、それ以外は18世紀後半のものである。10は土坑4より出土した肥前磁器皿である。高台径3.3cm、残存高1.7cm、高台畳付けは露胎で、内面に草花文の染付が施してあり、濃い色に発色している。11は遺構外から出土した唐津焼香炉である。高台径4.3cm、残存高5.0cm、削り出しによる輪高台で高台付近は、露胎である。外面は



写真16. 埋桶(北より)

灰色の釉が施されている。

出土遺物からみて、検出した遺構は18世紀後半から19世紀前半にあたるものが大半を占める。これ以外のものは、柱穴11から出土した中世の瓦器の小片(写真18-5)等がある。



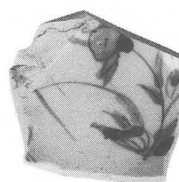
写真17. 第90次調査区全景(西より)



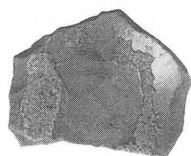
1(6)



2(7)



3(10)



4(9)



5



6

写真18. 第91次調査出土遺物

Ⅲ－5 有岡城跡・伊丹郷町 遺跡第92次調査

所在地 伊丹市伊丹1丁目332-5

調査面積 7.5m²

調査期間 平成2年10月17日～10月19日

調査概要 今回の調査は、店舗付住宅建設に伴い、その事前調査として実施した。

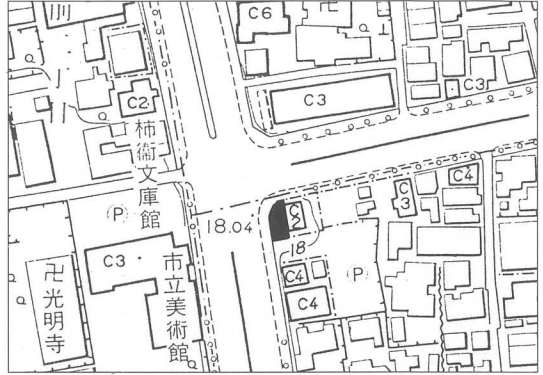


図19. 第92次調査地点図(1/2,500)

調査地点は、伊丹郷町の中心部を南北に縦貫する県道尼崎・池田線と県道伊丹・豊中線の交差点の角に位置する。県道尼崎・池田線は、現在は拡幅されているが、江戸時代からの伊丹郷町の本町筋にあたる。当時の本町筋は、大規模な酒蔵が建ち並ぶ伊丹郷町の中心部で、有岡城の頃から変わらずにこの位置に通っていた。有岡城の本丸(主郭部)からは北西にやや離れ、その距離は400mである。

調査の範囲は南北3m、東西2.5mと狭く、確認調査に近い規模となっている。調査にあたり、上層部はすべて重機により掘り下げ、地山面にて遺構の検出を行った。

遺構 検出された遺構は、土坑12基、柱穴3基である。遺構のすべては地山面において検

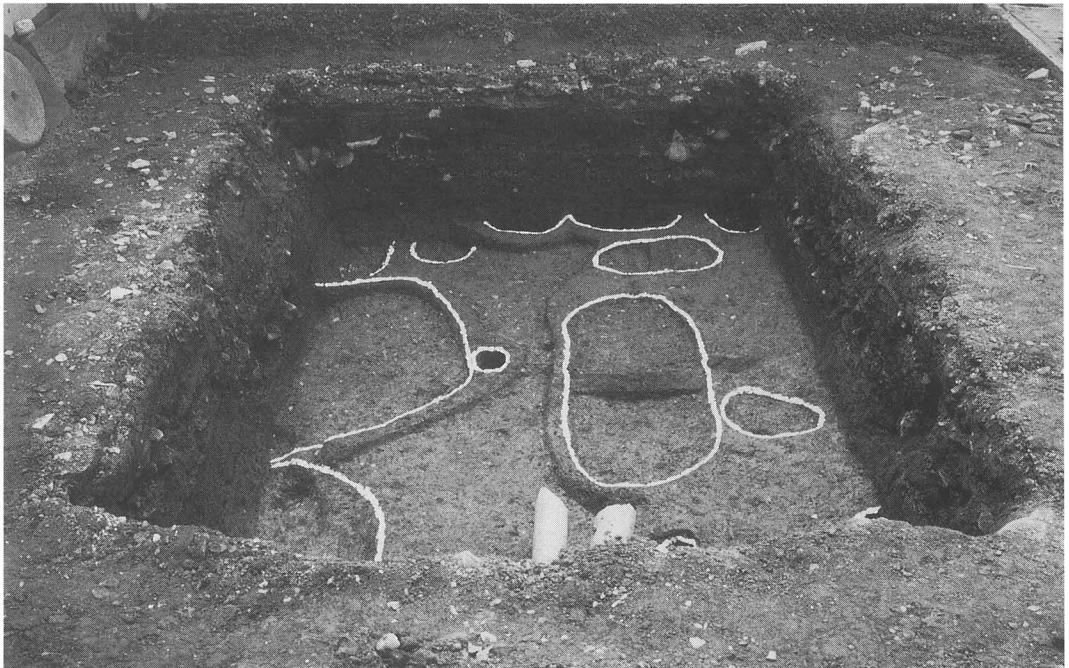


写真19. 第92次調査区全景(北より)

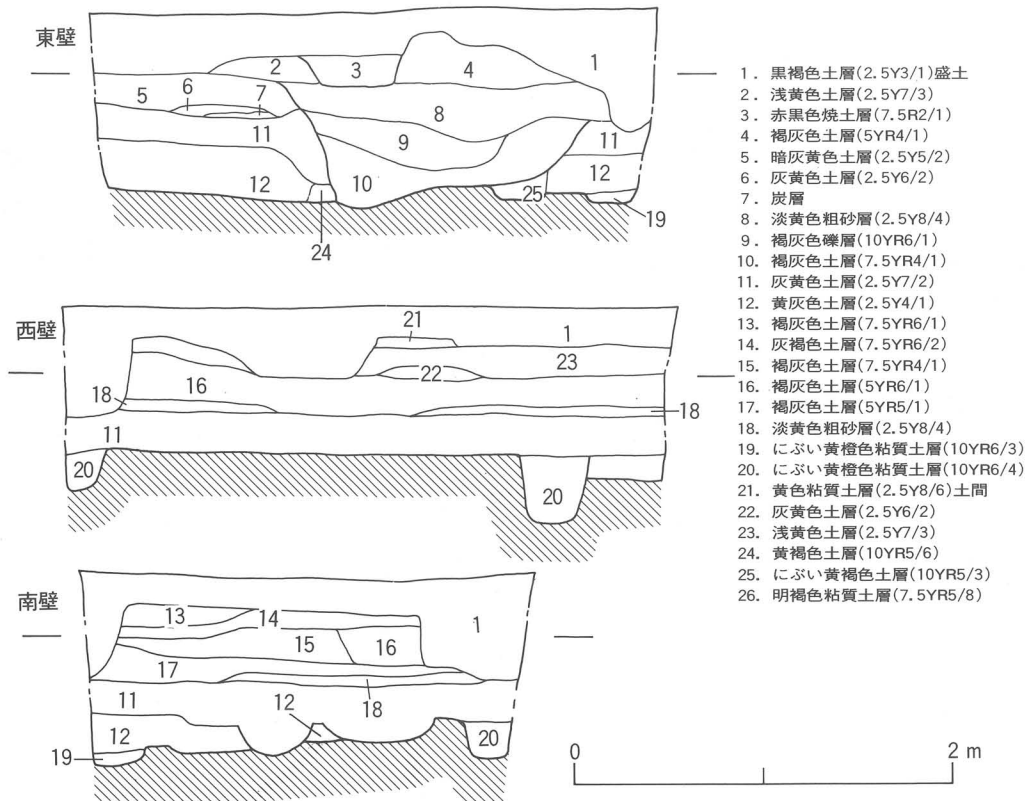
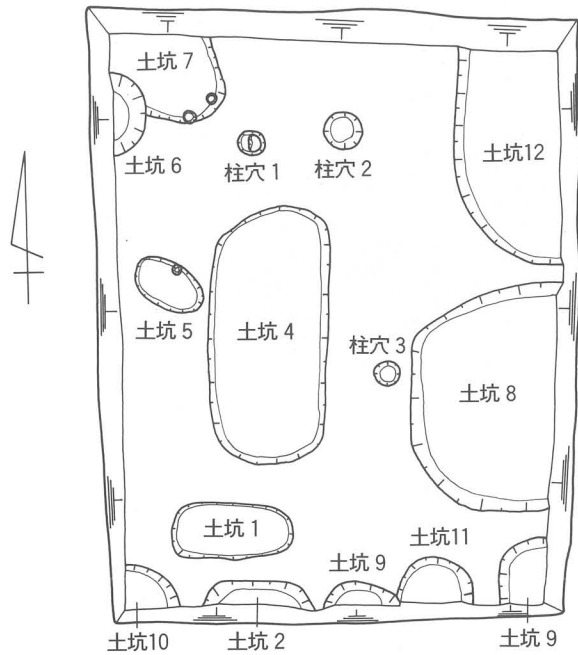


図20. 第92次調査遺構図 東壁・西壁・南壁土層図

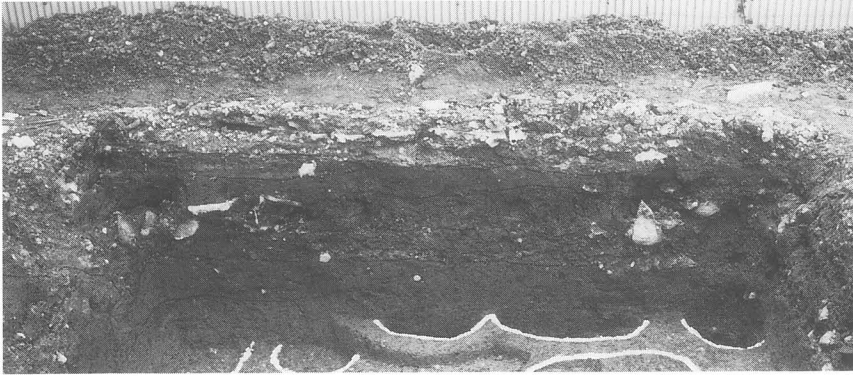


写真20.
南壁土層
(北より)

出した。これら遺構の掘り込み面は、上層部からのものが多く、したがって遺構の時期は江戸時代が中心となっている。しかし、中には地山面から掘り込んだ有岡城以前の時期の遺構も発見されている。

有岡城以前の遺構には、土坑6、土坑7、土坑9、土坑10がある。調査区西壁に沿って検出された土坑6と土坑10は径40cm、深さ30cm前後の規模の柱穴で、掘り込み面と規模および埋土が一致しているので同一の掘立柱建物の一部と考えられる。埋土内より瓦器碗の破片が出土している。また、調査区南東隅から検出された土坑9からは、蓮弁文青磁碗の破片が出土している。

江戸時代以降の遺構には、土坑1～5、土坑8、土坑11～12がある。掘り込み面から江戸時代の所産と考えられるが、出土遺物が少なく時期の特定ができない。

出土遺物 出土遺物は僅かで、しかも細片であるため図示することができない。しかし、土坑9から出土した蓮弁文の青磁碗は、細片ながら鎌倉時代の輸入陶磁器であることがわかり、当遺跡出土の遺物の中でも最も古いものである。

有岡城の前身である伊丹城は、鎌倉時代末に築城の時期が考えられているが、今回検出された掘立柱建物跡や青磁などの遺物は、伊丹城築城の時期を前後する頃のものであり、重要である。

IV. まとめ

この調査概報は、国庫補助事業として実施した有岡城跡・伊丹郷町遺跡の発掘調査の成果をまとめたものである。有岡城跡^{註1}の発掘調査は、昭和50年に始まり、現在までに140次をこえる。今回報告したのは有岡城跡・伊丹郷町遺跡第79・88・90・91・92次調査の5個所である。第79次調査は平成元年度に実施し、それ以外は平成2年度に実施したものである。今回報告した5個所の調査面積はいずれも狭く、出土遺物については第79次調査は遺物整理箱に4箱、それ以外の調査は1箱ずつと少量である。

次に各遺跡の所見を述べて、まとめにかえたい。

第79次調査

惣構の南側に位置し、江戸時代このあたりは外城村に属している。「元禄七年柳沢吉保領伊丹郷町絵図」(図21)^{註2}をみると、調査地点は元禄七年(1694)当時、柳沢吉保領であり、「酒作り庄兵衛」の東奥の一角にあたるので、調査地点も酒蔵の一部であったと考えられる。

第2面で検出した竈1は、焼成部が井戸1によって壊されているため、構造はわからない。二段に積まれた「コ」の字状に巡っている石組は、構造上、竈の焚口部と考えられる。伊丹郷町にみる大型の竈の構造は、半地下式で焚口部は土間面(生活面)より一段降り、焚口部の周囲に石を組むものもある。伊丹郷町では酒蔵用竈の検出例が多い。その特徴からみると竈1は酒造用の竈の可能性があり、絵図にある酒蔵と関連のある遺構は竈1と推定される。竈1は、出土遺物から18世紀後半に埋められたことがわかり、元禄七年の絵図にある「酒作り庄兵衛」の酒蔵は18世紀後半までこの地点にあったと考えられる。

第88次調査

「寛文九年伊丹郷町絵図」(図22)^{註3}をみると、当地点は空地になっていて、家並は描かれていないので、寛文九年(1669)頃には家が建っていなかったこ

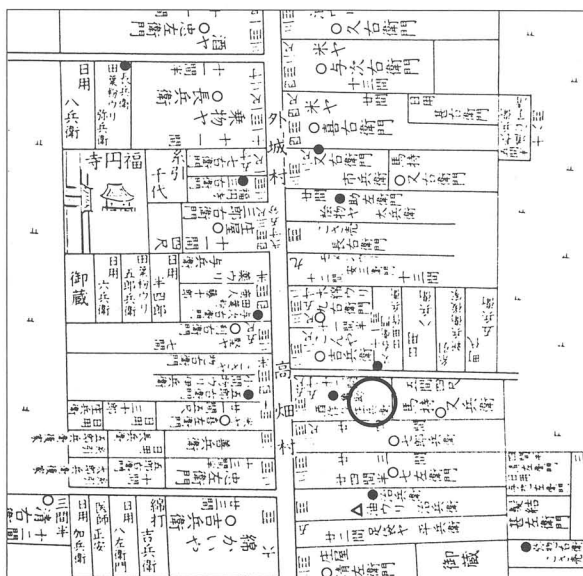


図21. 「元禄七年柳沢吉保領伊丹郷町絵図」解説図

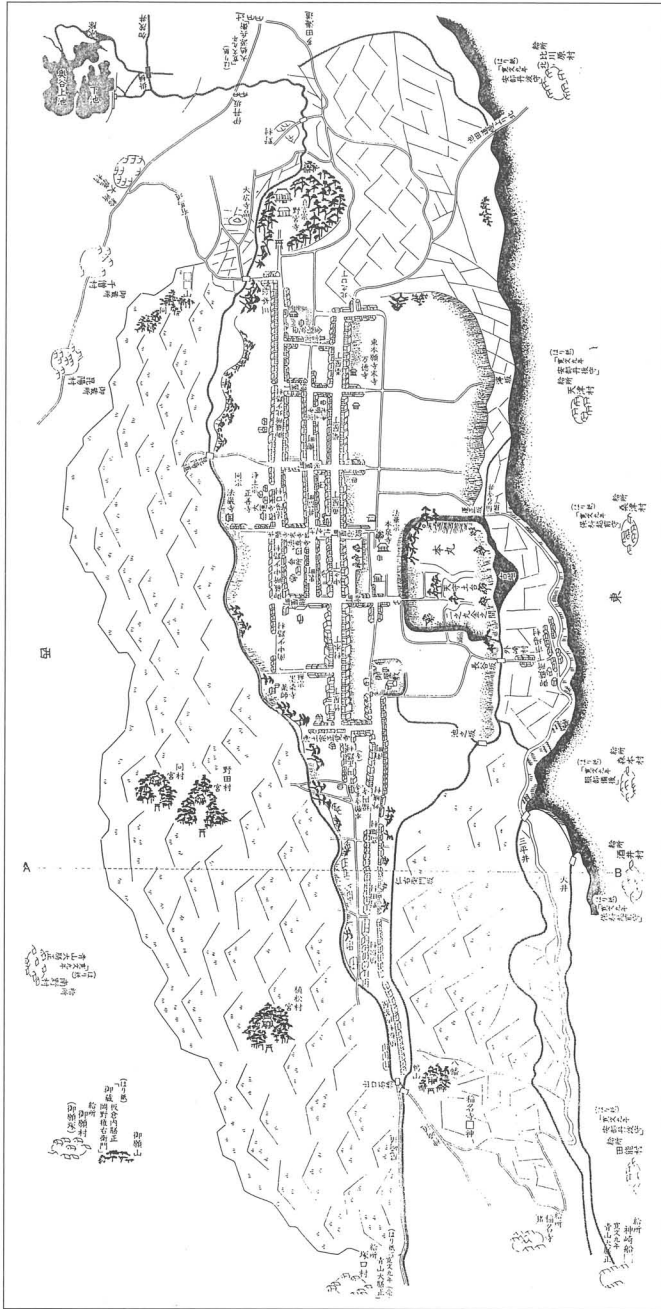


図22. 「寛文九年伊丹郷町絵図」

とがわかる。当地点からは中世の時期と18世紀後半から19世紀代の遺物が出土したが、17世紀代の遺物がないので、絵図の寛文九年頃に空地になっていることと一致する。

「寛政八年伊丹細見図」(図23)^{註4}をみると、寛政八年(1796)当時から調査区の東側に南北に通る道路があり、通りに面した東側が表側、西側が奥側と考えられる。またこの時期の柱穴は表側で数多く検出したので、通りに面した表側に建物が建っていたと考えられる。当地点で検出した埋桶4基は建物の奥側に存在し、出土遺物は18世紀後半から19世紀代のものである。伊丹郷町では18世紀後半以降、桶が便所として使われるようになったこと、建物の奥側に便所が存在する例が多いことから、埋桶4基は便所遺構と考えられる。また同じ通りに面していて、当地点から北へ40mの地点で実施した第91次調査でも、敷地奥側で18世紀後半から19世紀前半の埋桶を検出した。これも便所遺

第90次調査

第79次調査と同様に惣構の南域に位置する。江戸時代このあたりは円正寺村に属している。円正寺村が近衛家領になったのは、寛文元年(1661)のことである。

当地点で出土した土坑1・6は、埋土がすべて焼土層で、出土遺物は二次的に焼成を受けているもの(図14-1.2.4)もあるので、焼土を処理した土坑と考えられる。伊丹郷町では元禄時代以降、何度か記録に残っている大火があり、これ以外にも火災があったと考えられる。これらの火災の後始末をするために掘られた土坑が焼土処理土坑で、焼土のほか

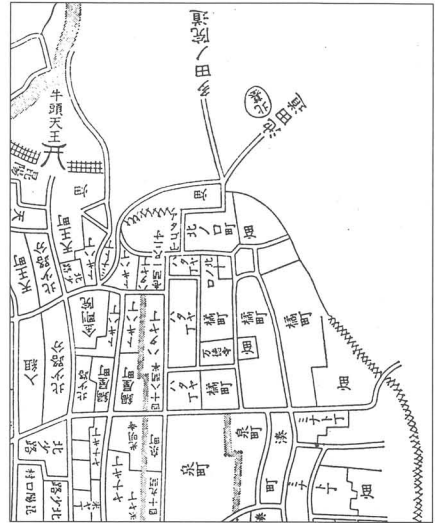


図23.「寛成八年伊丹細見図」解説図

焼けた瓦等の二次的に焼成(火災時の焼成)を受けたものが出土する。円形または方形(大型のもの)の土坑が特徴である。このような焼土処理土坑は、伊丹郷町を例にしてみると屋敷地内から発見されることが多いので、第90次調査地点には当時建物が存在していたことが推定できる。土坑1・6からの出土遺物は18世紀前半のもので、この頃に火災があったと推定される。土坑1・6よりも上層で南壁第22層も同様の焼土層である。このことから、当地点で18世紀前半以降にも火災があったことがいえる。この地点の火災の記事は文献にはみられず、新たな発見である。今後、この周囲の発掘調査をしていくなかで、火災の広がりや時期的なこと等も合わせて検討していく必要がある。

第91次調査

第88次調査と同様に惣構の北東部に位置し、「寛文九年伊丹郷町絵図」(図22)をみると、当地点は空地になっている。この空地は、本丸部分と町屋の間にあたる。「信長記」によると「城と町の間ニ侍町御座候」とあるので、この空地一帯に侍町があったと考えられる。当地点から北側には北之口という地名が残っている。北之口は有岡城惣構の出入り口の一つと考えられる。当地点より北へ約30mの地点の第17次調査では、16世紀代の方形区画の溝が発見された。この遺構は有岡城の侍町の遺構と考えられる。当地点では瓦器碗の小片等の遺物が出土し、柱穴等の遺構が検出された。当地点より南へ40mの第88次調査でも瓦器碗・土師皿等の遺物が出土し、掘立柱建物跡や柱穴等の遺構が検出された。当地点及び第91次調査で検出した掘立柱建物跡や柱穴等の遺構は有岡城の頃のものと考えられ、第17次調査と同様に有岡城の侍町の遺構と推定される。また掘立柱建物跡の向きが現在の道路と

直行する方向にあるので、現在の区画と変わっていないことがわかる。有岡城の侍町の遺構はこの近辺でもみつかりつつあり、今後の調査が待たれる。

第92次調査

当地点の北側は県道伊丹・豊中線が東西に走り、西側は県道尼崎・池田線が南北に走る。当地点は、その交差点の一角に位置する。県道尼崎・池田線は江戸時代、伊丹郷町を南北に縦貫する本町筋にあたる。本町筋は有岡城の頃からこの位置に存在し、早くから町屋が並び、江戸時代には大規模な酒蔵が建ち並ぶ伊丹郷町の中心地であった。

土坑9より出土した蓮弁文の青磁碗は、鎌倉時代の輸入陶磁器で、当地点出土の遺物の中で最も古いものである。この青磁碗は、輸入陶磁器で貴重なものであるので当時一般の人々には手に入りにくい。このような遺物が出土したことは、当時青磁碗を入手できる階層の人がこの地点にいたとも考えられる。このほか同じ時期のものとして、土坑6・10より瓦器碗の小片が出土した。

有岡城の築城は、鎌倉時代の末と考えられている。今回出土した青磁碗や瓦器碗等の遺物は、有岡城築城時前後のものである。この時期のものとしては、県道伊丹・豊中線沿いに当地点より約200m東側の第109次調査でもみつまっている。この調査区は有岡城跡の東端で、東側に5mの段差があり、崖状になっている。この調査では階段状の道状遺構を検出し、この遺構より瓦器碗等の14世紀前半の遺物が出土した。このような有岡城築城頃の遺構は、中世の有岡城を研究していく上で重要である。

註1. 有岡城は天正二年(1574)に荒木村重が入城時に改名されたもので、それまで伊丹氏の居城の頃は伊丹城と呼ばれていたが、ここでは統一して有岡城と呼ぶことにする。

註2. 八木哲浩編『伊丹古絵図集成(別録)』「伊丹資料叢書6」伊丹市立博物館 1982

註3. 八木哲浩編『伊丹古絵図集成 本編』「伊丹資料叢書6」伊丹市立博物館 1982

註4. 註3に同じ

報告書抄録

ふりがな	いたみしまいぞうぶんかざいちょうさがいほう							
書名	伊丹市埋蔵文化財調査概報Ⅳ							
副書名	有岡城跡・伊丹郷町遺跡の調査							
巻次								
シリーズ名	伊丹市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第21集							
編著者名	小長谷正治 細川 佳子							
編集機関	伊丹市教育委員会							
所在地	〒664 兵庫県伊丹市千僧1丁目1番地 TEL 0727-84-8090(直)							
発行年月日	西暦1995年 3 月 日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ありおかしょうせき 有岡城跡 第79次調査	ひょうごけんいたみし 兵庫県伊丹市伊丹 5丁目696-2	28207	61	34°46'26"	135°25'22"	19890703~ 19890713	28	個人住宅建設
ありおかしょうせき 有岡城跡 第88次調査	きたほんまち 北本町1丁目79	〃	〃	34°46'49"	135°25'18"	19900704~ 19900706	30	同上
ありおかしょうせき 有岡城跡 第90次調査	いたみ 伊丹4丁目726-1	〃	〃	34°46'26"	135°25'19"	19900922~ 19900927	24	同上
ありおかしょうせき 有岡城跡 第91次調査	きたほんまち 北本町1丁目56	〃	〃	34°46'50"	135°25'18"	19900928~ 19901002	21	同上
ありおかしょうせき 有岡城跡 第92次調査	いたみ 伊丹1丁目332-5	〃	〃	34°46'46"	135°25'15"	19901017~ 19901019	7.5	店舗付個人 住宅建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
有岡城跡 第79次調査	城館・町屋	中世・近世	井戸1、かまど2、 炉跡1、土坑16、溝4		陶磁器、瓦4箱			
有岡城跡 第88次調査	〃	〃	柱穴28、土坑3、 埋桶4、坑跡8		陶磁器1箱			
有岡城跡 第90次調査	〃	〃	柱穴3、土坑11、 埋桶2、礎石2		陶磁器1箱			
有岡城跡 第91次調査	〃	〃	柱穴12、土坑5、 埋桶5、坑跡2		陶磁器1箱			
有岡城跡 第92次調査	〃	〃	柱穴3、土坑12		陶磁器1箱			

伊丹市埋蔵文化財調査報告書第21集

伊丹市埋蔵文化財調査概報Ⅳ
有岡城跡・伊丹郷町遺跡の調査

1995年3月発行

発行 伊丹市教育委員会生涯学習部
社会教育担当

〒664 兵庫県伊丹市千僧1丁目1番地

TEL (0727) 83-1234(代)

印刷 関西成光株式会社

TEL (06) 462-7501
